よくある転生の話-携帯獣の話-

イザナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
よくある転生の話－携帯獣の話－

【Ｎコード】
Ｎ３３７１Ｕ

【作者名】
イザナギ

【あらすじ】
ある日突然、青年が目を覚ますと、そこは『神様』がいて、なぜか知らないけど『転生』させてくれるという。
彼が選んだその道は……？

転生した先は、ポケットモンスターの世界！　しかも生まれた時点から！！　ついでに主人公でも無い！！！
『ちょｗｗ人生最初からとかｗｗｗｗなげぇよｗｗｗｗ』とか、『主人公じゃないなら面白みねぇじゃんｗｗｗｗ』とか思いまし

たが、『逆にこれは人生やり直すチャンス！？』とか、『面倒事はやんなくて良いんじゃね？』　とプラスに考えることにして、彼は生きていくことを決意します。
まぁしかし、そうは問屋がおろしません（黒笑
結局彼はどうなるんでしょうか？　それは見てのお楽しみ。

プロローグ（前書き）

やたら長い伏線だらけのプロローグ、始まり始まり～

プロローグ

……なんだ……ここ……真っ白じゃん……

……何にも見えねーし……そういえば、体の感覚がねーな……

……目を凝らしても、白、白、白。なんか別の色が見たくなってきた……

『――――――……きが……たか……――――――』

……誰だ？……真っ白だから何にも見えない……

……あれ、俺、声が……それに……声もよく聞こえない……

『――わ……こえ……こえるか？――――――……いしきは……よう…な』

……あぁ、はっきり聞こえてきた。白一面の景色だった目の前が、やっと色づき始める。……おせぇよ……

……にしても、誰だ、俺の目の前にいる爺(じい)ちゃんは……全身真っ白で、真っ白の長髪とこれまた真っ白い腰よりもある長～いひげを蓄えている。

……ひげが長すぎるせいか、体に纏(まと)ってる布をおさえるためのベルトに挟んでる。……どこぞの魔法学校の校長かい……

そのじいちゃんは今、険しい顔して唸(うな)っていた。

『――――それにしても手違いとは……なんということだ……この者

はまだ己の命を全うしとらんではないか』

――それにしてもでけぇな、じいさん。２メートルくらいあんじゃねーの？　しかもありがたそうな後光まで背負ってるし。
……にしても、どっかで見たことあるような格好だな。

『――……ん？　おお、ようやっと気づいたか』

……あぁ、思い出した。

「神様だ」
『なに？』

ほんの１年もないくらい前に読んだ漫画に描かれてた、ギリシャ神話に出てくる最高神『ゼウス』。その姿にそっくりだった。
……そのことを目の前の、神様らしきじいさんに伝えると

『なんとっ……！　あのようなスケベ野郎ではないわ、たわけっ！！』

なぜか俺が怒られた。
いや、俺のイメージだし、どっちかと言えば、そんな姿をしているじいさんに原因があると思うんだが。
そう返した。

『ぬぐぐぐぅっ！！　……あのド阿呆（あほう）、次に顔を合わせた時が、アヤツの最期じゃ……！！！』

おおぅ。
――ゼウス様。俺、あなたの色気に従順なところが好きでしたよ。

……まぁ、仮に神様だとしても、ヘラっていう美人の、言葉通り女神様な奥様がいたってのに、ほかの女神様に手を出す、美人がいればまず襲う、男の子もオッケー、ノンケでも（ｒｙ　という、ある意味色ボケした奴とそっくりなんて言われれば、誰だろうと良い気持ちはしないだろうな。

「で、さ」

『ぐぬぬぬぬ……ん、なんじゃ？』

「俺、なんでこんなとこにいんの？」

なんかドタバタして流れかけてたし、グダグダしてきたし。

ここらで戻した方がいいよなぁ、と、歯軋（はぎしり）りまでしてるじいさんに、今まで感じてた疑問をぶつけてみる。

と、いうことで

「ここドコ？　天国？」

『――う、うぅむ、多少、違うぞ』

率直に聞いてみたら、歯切れの悪い言葉が返ってきたな。

真っ白な空間だし、神様らしき人までいるし、これで天使でもいれば、俺の中での天国（欧米ｖｅｒ）のイメージにぴったしなんだけどなぁ。

いや、そうしたら俺、死んじまってんじゃん。やだな～、まだ見終ってないアニメとかあんのに。

『お、落ちつけ、少年よ！』

え～、でもさ、いきなり死んでるなんて言われたらさ、誰だってパニックになるでしょ。

むしろ俺はまだ落ち着いてますよね？
……てか、俺もう『少年』なんて歳じゃなかったし。どっちかって言ったら青年だし。１９だぜ？

『……落ち着いているように見えて、混乱しておるな。無駄なことばかり気にかけ、自分の状態を直視しようとせん』

……む、なんかちょっと癪に触るな。

「じゃあ、俺はいったいどうなってんだ？」
『さっき、お主が自分で言っておったじゃろう。死んだのじゃ』

なんだよ、やっぱ死んでんのか。
やだな～、読んでないマンガとか小説とかあったのｎ『人の話は最後まで聞くのじゃ』
話の骨、折るなよ……てか、あんた人間じゃねぇだろ、ってツッコんでいい？

『人の形はしておるわ。それよりも、今のお主の状況じゃ』

……うまく返されたようで。
しかし、今の自分がどうなっているのか、気になりもする。
これは大人しく聞いておく他ないか。

『まずここは、天国ではない。もちろん、地獄でもない』
「ここが地獄なら生まれ変わったら白が怖くなる」
『腰を折るな。……どこか、というと、お主らの言うところの天国と地獄の間じゃ。死んだ人間はここで自らの犯した罪や、為した善行などを総評し、天国へ行くか、地獄へ落ちるかを決める。わしはその最終決定者で、この空間の最高責任者じゃ』

まとめると、このじいさんは、日本でいえば閻魔様みたいなものらしい。
で、俺はそんなとこで何してんのさ。

『実は……話せば長くなるので割愛しよう。
お主はあることがあって、死にかける重傷を負ったんじゃが、その傷自体は時間をおけば必ず回復するはずじゃった。
しかしの、わしの配下に魂を回収する、お主たちの言うところの『天使』に新しく新人が入ったんじゃがの』

天使って新入りとか人員の入れ替えとかあるんだ。
そう言ってみると、

『わしら――お主たちの言うところの『神』――に寿命はないが、『天使』――お主らに合わせるとしよう――には、お主らの何十倍とはいえ、寿命はあるのじゃ。ゆえに、まぁ非常に稀ではあるが、高齢になり任務遂行が厳しくなった者と、まだ若い者とが交代することがある。
お主の魂を持って帰ってきた『天使』は、お主らの時間に換算して、お主が死んだ日の前日に入ったばかりなのじゃ。
じゃから別の人間の魂を回収しに行ったところ、間違えてお主の魂を回収してしまったのじゃ』

わぉ、なんてこった。この人たちの感覚からすれば1時間も無いほど前のことだったりするのだろうか。

『まぁ、そのくらいかの。ちなみにその『天使』は、今、上司にお灸をすえられているぞ』

……思っていたより組織的だなぁ。
で、現在の自分の体は、というと

『お主が死んだと確認されて何か月も経っておる。すでに火葬されてしまった』

あらま、もう元には戻れねぇのな。あ～あ、まだみｔ『もう聞き飽きたぞ』
……遮るこたぁねーだろ……。

『お主は、実際は死ぬ予定ではなかった。しかし、もう元には戻せぬ。
時間を巻き戻し、世界を――――たった一人の人間を元に戻すことさえかなわぬ。
そこまでの権限は、お主らの言うところのわしら『神々』にもない』

じゃあ、俺はどーなんのさ?

『天国や地獄で過ごしたことのない魂は元の世界へ帰すことはできぬ。
今のままでは『そのままの姿で生き返る』ことはかなわぬ』

で? 何か方法が?

『しかし、『元の世界で今のままの姿で生き返る』ことはできぬが、『別の世界で生まれ変わる』ことはできる。
つまり、お主が生きていた世界ではない別の世界で、赤ん坊の頃から始めることができるのじゃ』

つまり?

『いわゆる『転生』、というやつじゃ』

わ～ぉ、体験するとは思わなかったぜ。
にしても、やけに丁寧に説明してくれるな。
もしかして……

『……入れ替えの時期になると多発するからの。数自体は多くないが、必ず起こるのが悩みの種じゃ』

……ご苦労様です。

『もっとも、お主のように比較的冷静にいられる者は少ないからの、お主のような人間は楽じゃ』

お褒めいただき、ありがとう。しかし、俺はこれからどうなるので？

『行きたい世界に転生させてやろうかの。それがわしらの、今だ生きるべきであった命に対する唯一の贖罪じゃ』

そっか～。どこ行こうかな。
ちなみに、アニメとかゲームとかの世界って……

『お主らが作り出した『世界観』は、『その世界が存在する』からこそ存在できるのじゃ』

……？？？？　すんません、哲学は頭が痛くなります。

『元ネタがあれば行ける』

ありがたきお言葉、ありがとうございます。
でも、ホントにどうしようかな。候補としてはいくつかあるけどなぁ……

『ちなみに生まれたてでも昔の世界の記憶は残る。
主人公のような存在にはなれんぞ。なんせ、その世界にはすでに『主人公』がおるのじゃから』

じゃあ脇役とか、スーパーサブは？

『なれるぞ。お主にそれだけの力があるならば』

脇役でも活躍できそうなもの、か。
なら、これがいいのかな。

『決まったか？』

――――――おし、決めた。俺は、あの世界へ行く。

――――――

これが、『私』が体験したこと。
信じてもらえないだろうが、『私』が生きた証（あかし）を残すにはこの方法が一番だろう。
この後、また魂を間違ってとられることもなく、あの老人の『神』に会うこともなかった。

もう暫(しばら)くすれば、前回とは別の形であの『神』に会えるだろう。
しかし、『私』はまだ少しだけ生きようと思う。
この本を完成させるために。『私』の話を信じてくれた人々のために。『私』が支え、そして『私』を支えてくれた人々のために。
なにより未来を生きる者たちのために。

この世界を、体を張って守った者たちがいることを、知ってほしくて。

記憶の一片に、彼らのことを刻んでほしくて。

教科書に名を残さなかった英雄たちのことを、知ってほしくて。

――

――――――――

あ、そういえば

『ちなみに、お主を間違えて連れて来てしまった奴じゃがな、『責任を取る』とか言って、ついて行くそうじゃ』

――――……まじで？

プロローグ（後書き）

プロローグ、終了です。
無駄になげぇｏｒｚ
無駄になげぇｏｒｚ
無駄になげぇｏｒｚ（大事なことなので3回言いました）
プロローグで３０００字後半って……
次からは本編です。
名前などは後程。

一話　ミシロにやってきた男の子（前書き）

ストーリーベースはエメラルド。他地方は旧作のみなので、たぶん飛ばします。
ＤＳ買ってシンオウかイッシュやりたい……新作やりたい……ｏｒｚ
タイトル通り、主人公は男の子です。

一話　ミシロにやってきた男の子

ある晴れた昼下がり。
気持ちの良い青空は、洗濯物や布団を干したり散歩したり、はたまた草原に寝転がって見上げるのに絶好の天気。
元気に外を走り回る子供たちの姿は、眩しいくらい。

かくいう俺も、肉体労働で眩しく汗をかいてます。

はじめまして。俺の名前は『オダマキ・カナタ』。

……驚いた？　なんと、ホウエン地方でポケモンをくれるあのオダマキ博士の息子として、この世界に生を受けちゃいましたっ！
つまり、オダマキ博士には三人の子供がいることになるけど、俺はその中の一番上。１２歳になるお転婆（てんば）妹と９歳のやんちゃな弟の面倒を見てる。これでも前世は、一人だけど弟がいたから扱いには慣れてるけどね。

そんな俺も今年で１６歳となって、今ではフィールドワークを主として活動しているオダマキ博士……いや、親父の手伝いとして、このホウエン地方を駆け巡ってる。一応バイト扱いだから給料出るし、結構いい額なんだなぁ、これが。

ちなみに、なぜオダマキ博士を『親父』と呼ぶかというと、もうこの世界で１６年も家族をやってるんだ。マジで最初は赤ん坊だった俺をこの年まで育ててくれたんだから、他人行儀なんて馬鹿らしいだろ？　だから俺はいっつもオダマキ博士を『博士』じゃなくて『親父』と呼んでる。

それが『俺をここまで育ててくれた両親』への恩返しだ。

……もっとも、前世でそれができなかったのは悔しい。だからせめて、この世界では、前世で出来なかった恩返しをしたかった。だからこの世界では、しっかりと生きていく。それが『前世の両親への恩返しになる』と信じてね。

……ん？　なんかシメった？　ごめんごめん、閑話休題。

さて、普段はフィールドワークで忙しい俺が、なぜミシロにいるのか、というと

「ごめんなさいねぇ、手伝ってもらっちゃって」
「いえいえ、今日からご近所さんですもの。助け合いは、当然ですわ」

お隣に引っ越してきた隣人の手伝いだ。
しかも母さんと同年代くらいの美人さん。この地方独特のイントネーションがないことと、言葉に特有の癖がないことなどから、カントーかジョウトの人なんだろう。
いわゆる『本州（ほんしゅう）』と呼ばれるこの2地方は、簡単に言えば『都会』で、ホウエンも開発が進んできたとはいえ、まだまだ『田舎』だ。
交通や生活面での利便性を考えれば、本州の都会の方が色々いいと思うのにわざわざホウエンに来た理由は

「夫がジムの準備もしないと、って行っちゃったんですもの。たまたまカナタ君が帰って来てて良かったわ」
「センリさん、よほどジムリーダーになれるのが嬉しかったんでしょうね」

「でも、一人じゃ放っておけないから、私たちがジョウトからついてきたのよ」

そう、この人の旦那さんが、ジムリーダーとしてこのホウエンに赴任したから。ちなみにジョウト地方の人のようだ。

といっても、このミシロタウンには、ジムはない。ではどこかというと

「でも、トウカシティって結構遠いでしょ」

「歩いて２０分くらいだって。道中には野生ポケモンもいるし、鍛練にもなるからって」

かなりストイックな旦那様のようで、家族をおいて2日ほど早く来たんだとか。……誕生日直前にプレゼントをねだる小学生か、と微妙なツッコミをいれて、作業に戻る。

話ではトラック2台分だとか。どんだけ量が多いのさ……まぁ、運送業者さんやその手持ちのヤルキモノやゴーリキー達が手伝ってくれるおかげで、何とか捌く事ができた。

……周りを見れば、ヤルキモノやゴーリキー達は疲れ果ててへたり込んでいる。

「次のトラックも、ですか？」

さすがにあの量は勘弁してほしい、と半ば懇願するような目で見ると

「ふふ、あとは大型じゃなくて中型程度よ。それに、中身はあんまり入ってないから」

……俺は大型に満載されたのを手伝わされとったんかい。

気づかなかった自分を恥じながら呪いながら最後のトラックを待っ

ていた。

数十分後に、最後のトラックがやってきた。
どうやら渋滞につかまったらしい。運転手が必死になって謝っていたが、奥さんは特に気にしていないようだ。
さすがジムリーダーの妻。この程度の肝っ玉がなくてはやっていけないのだろう、と妙な関心をした。
と、ここで母さんが帰るとのこと。
俺はせっかく受けた仕事だし、この後も手伝って、キリの良いところで切り上げる、と言って母さんを見送った。

「あら、帰ってもいいのよ？　バイト代はちゃんと払うし」
「妙なところで義理堅いんで、俺」

苦笑いを奥さんに返して、トラックの後ろのドアを開け放つ。

と、そこに若白髪君がいた。

「これは白髪じゃない、銀髪ですっ！！」

ツッコミご苦労。これで俺がボケに回れる。「勝手に人のポジション決めないでください！！」
うるさいなぁ。そんなんじゃホントに若白髪ができちゃうよ？　クールに行こうぜ、クールに。

おそらく、話にあったセンリさんの息子さんだ。

てかこれ地毛でしょ？　センリさんは黒髪だった記憶あるし、ママさんだって栗色系の髪色じゃん。
どうしたのさ、これ。

「……先祖がえりだそうです。数世代前に銀色の髪を持った外人さんが一族の家計の中にいたので」

家系図あるんだ。思ったよりも良いとこの子なのかな？　とは思ったが口には出さない。

良いとこの子なら、わざわざこんなとこにはこねぇだろうしな。

あ、そだ。

思い出して、右手を差し出す。

いきなりのことに銀髪の少年は少々戸惑ったようだ。

「？」

「俺の名前はカナタだ。君は？」

「え、えと、ユウキ、です」

おずおず、といった感じで、自己紹介とともに俺の手を握り返すユウキ君。

俺はその手をしっかり握り返して、力強くユウキ君に向けて言う。

「ミシロタウン、そしてホウエン地方へようこそ、ユウキ君」

不安でもあったんだろうか、強張っていたユウキ君の顔が段々とほぐれ、ユウキ君は満面の笑みで答えてくれた。

「はい！ありがとうございます！！」

一話　ミシロにやってきた男の子（後書き）

まだ冒険は始まりません。この後はライバル兼親友と最初のパートナーとの出会いがあります。

にしても本文がプロローグより短いとかｗｗうぇｗｗｗ

二話　ホウエンの女の子とジョウトの男の子（前書き）

今回でライバル兼親友となる、あの子が出ます。
ついでに、一人称の切り替えも試してみました。

二話　ホウエンの女の子とジョウトの男の子

俺に元気な挨拶をしてくれたユウキ君は、俺を部屋に案内してくれるという。
いい子だねぇ。

「といっても、引っ越してきたばかりだし、何もないんですけど」

苦笑いしながらユウキ君は俺を部屋に招き入れる。……うん、やっぱり良い子だ。

部屋の中は、というと、やはりというかユウキ君が言った通り、まだほとんど何もない状態だった。
ただ、ベッドやテレビ、パソコンなどはすでに搬入されており、新生活への期待を高めるかのように輝いて見えた。

と、ユウキ君はおもむろに近くに置いてあった段ボールの封を開け、中身を少し探ると、プチプチシートに包まれた円形の何かを取り出す。
時計のようだ。それも、青い。

ふと、どこかで見たような気がして頭をめぐらすと、存外すぐに答えにたどり着いた。

「それ」
「えっ？」

いきなり声をあげた俺を見やりながら、ユウキ君は電池を時計に入れるために動かしていた手を止める。

「いや、俺、兄弟がいんだけど、それの色違いを妹が持ってんだ。赤色の」
「へぇ～、妹さんがいるんですか？」
手を動かすのを再開しながらユウキ君は、興味を持ったのか疑問形で問いかけてくる。
「おお、いるぜ。ところでユウキ君は歳いくつ？」
「えっ？　えと、今年１２歳になります」
ということは今１１歳か。
うちのじゃじゃ馬も今年の誕生日を迎えれば、１２になる。
同い年か。……よし。
「うちの妹もおんなじくらいさ。
……ところでユウキ君」
「は、はい？」
おもむろに声のトーンが低くなった俺に少しビビった様子だが、聞く姿勢にはなってくれてるようだ。
つくづくいい子だなぁ、この子。
そんな重大なことでもないんだけどさ。
「うちの妹と、友達になってくれない？」
「えっ？　いや、はい」
混乱しながら答えなさんな。まぁいきなりシリアス口調になった俺も悪いんだろうけど。

「いやな、うちの妹はお父さんっ子でな、『お父さんのお手伝いしたい』ってフィールドワークの手伝いをするようになってさ」

かくいう俺もこの子等ぐらいの年から手伝い始めたんだけどさ。あの子も11歳になってから初めて、もう一年近く経つことになるわけで。

「フィールドワークの仕事の間、ミシロにはいないだろ？　滞在先も長くいるわけじゃない。

……必然的に、同年代の子供たちと接する機会が少ないんだ」

もちろん近所に住む女の子たちは、俺から働きかけると、持ち前の行動力で積極的に妹の友達となってくれたが、いわゆる『男友達』がいないのだ。

……女の子たちは目を輝かせて協力してくれるのに、男衆はどこか意気地がないようだ。

その意気地のなさも、『妹さんがかわいいから手が出せない』なんてことから来てるとなれば、その言葉がお世辞といえども悪い気はしないけど、そんなことでは大物をも逃がしてしまうぞ、男衆よ！

まぁ男どもは、いずれは形振り構わないようになるかもしれんが、妹が男嫌いになるのは良くない。

「このまま成長してしまえば、『男子への接触の仕方』を知らずに大人になり、いろいろ障害が出てくるかもしれん」

研究者は、最近女性が増えたとはいえ、まだまだ男性の比率が高い。もし我が妹がその世界に入りたいと望むのなら、男性と接する方法は心得ておくべきだ。

「と、いうわけで、ユウキ君にはわが妹の一人目の『男友達』となってほしい」
「わわ、わかりました……」
俺の話がけっこう真面目に聞こえたせいか、神妙にうなずくユウキ君。

……ダマすようですまないけど、俺の話ほとんど嘘だぜ、と心の中で謝る俺。

実際、我が妹には、彼氏どころか男友達がいないのは事実だが（それは周囲の、本当の意気地の無さという点もあるのだが）、男相手に臆することもなく、堂々と語り合うくらい肝は太い。
肝の太さは母さん譲りだ。案外、フィールドワークは危険がつきもの。いつ死ぬかわからない、というのも、あながち冗談ではない。
それでも帰ってくることをただ待つことができるからこそ、母さんは親父の伴侶となることができたんだ。

おっと、また身内自慢になっちまった。
で、なぜ俺はこんな嘘をつくかというと、ユウキ君はこのホウエンに来たばかりだ。
違う地方から来たのだから、当然友達なんかいない。
じゃあつくっちゃおうよ、って話で、手始めにうちの妹と友達になってもらう。
妹は近所にも顔が広いから、すぐに友達が増えるだろう、と俺は考えたわけだ。

「じゃ、よろしく頼む。あいつも今はフィールドワークで家にいな

いけど、君が来ることは伝えてあるし、すぐに戻るって言ってたから」

「あ、はい」

「うちの家は君んちのすぐ隣。遠慮なく遊びに来てね」

「わかりました、片付けがある程度終ったら、お邪魔します。お手伝いのお礼もしたいですし」

……ほんっとにいい子だなぁ。前世の俺なんてこの頃にこんな気遣い出来たかよ。

昔基準で考えるのは、今までの記憶を継承してからもう一度１６年生きているからだ。そりゃ反省もしてまともにやるさ。

そして俺はユウキ君にお礼を言って退出し、ユウキ君のママさん（以後、ママさん）から、かなり色を付けてもらったバイト代をもらって、すごく恐縮しながらユウキ君の家を出た。

この後、俺はフィールドワークのレポートを研究所に提出しに行くことになってるから、研究所へ足を向けた。

研究所に到着して最初に聞いた言葉は

「博士ぇーーー！！！」

「どこですかーーーー！！！」

という助手二人の悲鳴だった。

このように親父は前触れなく、突然フィールドワークに出かけることがある。

その際にすべての仕事を任（押し付けられる）されるのが、この二人の助手だ。そしてその場に居合わせると、十中八九、俺も巻き込まれる。頭脳労働は苦手な俺としても、親父のこの放浪癖は最近、頭痛の種になってきた。

（面倒事）

しかし、ここまで悲痛な声を上げる二人を放っておけるわけもなく、自分のお人好しぶり（周囲も承知済み）にうんざりして、研究所への歩みを進める。

……あ、ちょっと眩暈（めまい）がした……。

―――――――――――――――――――――――――――――――――

こんにちわ、ユウキです。

頭の毛は地毛ですよ、染めてません。ついでに釘を刺しますが、白髪ではなく銀髪です。

これで子供の頃いじめられたんですから……。

さて、そんな事はさておいて、カナタさんの依頼がてら、オダマキ家の皆さんにご挨拶とお礼をしに行きます。

お土産はチョウジタウンの名物『いかりまんじゅう』。オレも怒りの湖に連れてってもらったことが何度かありますし、父さん――ジムリーダーになる前のセンリ――が『修行』としてジョウトやカントーを旅したお土産に買ってくることもありましたので、オレたち一家では馴染みの味として親しまれています。

そうこうしてるうちに、オダマキ家へと到着。

それにしても、カナタさんの妹さんって、どんな人なんだろうか。

惚気（のろけ）るように「お世辞で可愛いと言われてる」って言ってたけど、男は結構正直者だ。

そして、カナタさん自身の親しみやすそうな人柄からして、お世辞ではなく、なかなか可愛いのかもしれない。

……う〜ん、ちょっと緊張してきた……。
少しだけ期待に胸を膨らませつつ、オダマキ家の呼び鈴を鳴らすと、カナタさんのお母さんが応対してくれた。

「あらぁ、君がユウキ君？　カナタが『お礼に来るって言ってた』っていうから、待ってたわ」
「はい、近所へのあいさつも兼ねてます」
「ふふっ、カナタの言うとおり、いい子ね。立ち話もなんだから、上がって」

すでにカナタさんからいろいろ聞いてるらしい。すんなりオレを家に上げてくれた。
あ、そういえば

「カナタさんは、どうしたんですか？」
「ああ……カナタは研究所に缶詰めになっちゃったわ」

なんでも、お父さんであるオダマキ博士が突然フィールドワークに出かけてしまい、残されている仕事を助手の皆さんと片付けているらしい。……ご愁傷様です。

でもすごいな、オレの5つ上だけど結構大人びてるし、研究所のお手伝いもできる。それに、男のオレから見ても整った顔立ちをしてる。
それに気もよく回るし、親しみやすい。……完璧人間じゃないですか。
そんなことをカナタさんのママさん（以後、ママさん）に向けて言ってみたら、

「あら、あなたの方がイケメンだってカナタも言ってたし、私もそ

れに賛成よ。それにあの子、イケメンとか言われるの、あまり好きじゃないらしくてね、謙遜して他人の名前を挙げるのよ」

オレはイケメンじゃないですよ、と返答しておきながら、どうして嫌がるのか理由を尋ねてみた。

「あの子は自分の悪いところしか見えてないの。あなたも同じ部類のようね。それに実際、あの子は完璧じゃないわ。炊事や洗濯はフィールドワークばかりやってたせいである程度はできるけど、最新家電を扱えないの。パソコンとか電子機器の類（たぐい）は研究でも使うからむしろ大得意なんだけど、日常生活では不自由してるのよ。それに、部屋を片付けられないの。でも、これは仕方ないわ。フィールドワークって自然観察だから泊まる場所の清掃には常に気をつけなくちゃならなくて、気を張ってるの。帰ってくると気が抜けるから、どうしても部屋が汚くなっちゃうのよ」

つらつらとあがるカナタさんの弱点。

やっぱりママさんだ、伊達にカナタさんを16年育ててきたわけじゃない。

そんなママさんに感心しつつ、その『汚い』カナタさんの部屋を教えてもらい、行ってみることにした。

階段を上って奥の部屋、とママさんは言ってたので、その通りに向かう。部屋に鍵はなく、内開き式らしい。

「お邪魔します」と誰に断るでもなく言ってはいると、確かに片付けはなされていなかった。

シンプルな四角い部屋で最初に目についたのは、本の山。

部屋の奥にある机を取り囲むように本が重ねて置いてあり、さながら本の城壁みたいになっていた。
オレから見て右手にある本棚にも本は納めてあるが、あまりにも数が多すぎて溢れ出している。
なんというか、『研究者の部屋』という感じだったけど、よく見れば左手のベッド付近に小さいテレビとゲーム機があり、ソフトもその脇の収納ボックスに仕舞われていた。
目を凝らせば、机の上に携帯ゲーム機もある。やはり、いくら大人びていようとまだ16歳の少年だ、ということなのだろう。

……でも、プレ○テや○SPっていうのは、ケンカ売ってるでしょ、カナタさん。
……あ、D○　Li○eだ。刺さってるのは……黒バージョン。
でもちゃんと他のシリーズも揃えている様子。
……緑でキラキラのパッケージ見たらうれしくなった、なんでだろ。

あまり長居も良くないだろうから、退出することに。
と、戻る途中、隣の部屋……おそらく妹さんの部屋のドアが開きっぱなしだった。
思わず足が止まる。瞬間、カナタさんの言葉が脳をよぎったが、本人がここにいないのでそのままドアを閉めて帰ることに――――――しようと思ったら、目の前にあるモンスターボールに目がついた。
なぜか知らないけど興味をそそられ、つられるように中に入ってしまう。

やはりというか、『女の子っぽい』部屋だ。
壁の色は薄いピンクだったりするし、床にはマットを敷いてあって、ぬいぐるみがちょこんと座ってる。
そんなことに目を配りながら、おもむろにモンスターボールを取り上げる。

と、

「あっ」
「えっ！」

急に後ろから声が上がったので振り向くと、ちょっと驚いた顔で口に手をおさえている女の子がいた。
おそらく妹さんだ。脳がそう答えを導くと、案の定、オレは慌てふためく。
弁解のために口を開こうとすると、その子は何かを納得したように頷いた。

「あ、えと、ごめん、扉が開いてたから勝手に……」
「そっか、君がユウキ君だね！」
「へっ？」

いきなり自分の名前が出たことに驚いた。
けどその子は構わず、先を続ける。

「そのボール、私のなんだ。昨日急いで出かけたから、忘れちゃって」

てへへ、と頭に手を置き苦笑いをしてる。
オレはボールを持ったまま話していることに気付いたので、慌ててその子にボールを差し出す。

「ご、ごめん、気になっちゃってさ」
「いいよいいよ、戸締りしてなかったのも悪かったし」

にぱっ、と……そう、ひまわりみたいな笑顔を返され、俺が差し出

したボールを受け取る。
オレはその笑顔に毒気を抜かれ、次第に肩の力が抜けてきた。
そして彼女はその笑みを浮かべたまま、

「私の名前は、オダマキ・ハルカ。今日から友達だから、呼び捨てしてね！」
「あ、ああ、うん、よろしくね、ハルカちゃん」
「ハ・ル・カ！」
「う、うん……ハ、ルカ」
「うん！」

『ちゃん』とつけられたことが不服だったのかアヒル口の釣り目になりながら訂正を要求してきたので、慌てて訂正する。
すると満足したのか、またひまわりの笑顔を見せて一つ頷くハルカちゃ「ハルカ！」
……心の中もダメですか、そーですか……。
はぁ……観念したかのように肩を落とすオレを見て、ハルカはなぜか満足そうにすると

「今日の夜は私の家で歓迎パーティだって！　私もちょっと雑用があるから今は休めないけど、パーティには参加できるからね。
その時、向こうのお話聞かせてね！」
「向こう？」
「ユウキ君は本州……ジョウト出身だったでしょ。私、本州に行ったことないから、お話が聞きたいの！」
「あ、ああ、うん、良いよ。友達だからね」

そんなオレの言葉に、やったーっ！！　と大喜びしながら、ハルカは飛び上がった。
そしてちょっと気になったので『雑用』とは何かを聞くと、

「レポートをお父さんの研究所に持ってくことだけど」

なんて言ったので、事情を説明して、全力で止めておいた。
そうしたら、今度はウチの家の片付けを手伝うと言う。
それも遠慮したが、

「暇なんだもん。お兄ちゃんと違って、整理整頓は得意だよ」

それにご挨拶もしたいし、なんて言われると止められる理由もなく、
ハルカは元気よく部屋を飛び出した。
「……ぐっじょぶ、お兄ちゃん」と去り際に聞こえた気がするけど、気のせいかもしれない。

……まぁドタバタしてたけど、なんだか心は暖かかった。
あと、カナタさんに伝えとかないと。

ハルカは本当にかわいいですよ。
間違いない。

これがオレと彼女との出会いだった。

予定以上に俺の作戦がうまくいったその頃、俺は書類の山に埋もれ

研究設備をいじくり、助手の二人と一緒に研究所内を駆けずりまわっていた。

「博士ぇーーーーー！！」

「どこにいるんですかぁーーーーーーーー！！！」

「帰ったら説教じゃ、クソ親父ぃ！！！！！」

……これでも、感謝はしてますよ？

二話　ホウエンの女の子とジョウトの男の子（後書き）

長くなったなぁ。
視点変更はうまくいったでしょうか……
――――――――――――――
→これで視点の切り替えを行います。
ちなみにそれぞれの一人称は

カナタ→『俺』
ユウキ→『オレ』
ハルカ→『私』

となってます。
基本的に、視点は男性方面を主としますが、女性の方もやってみたいですね。男ですけど。
次は初ポケモン！ユウキ君は何を選ぶのでしょうか。
あ、すでにカナタはマイポケ持ってますし、旅に出たりして鍛えてます。

三話　初めての相棒（前書き）

ポケモンには名前を付ける派ですか？
自分は付ける派です。
昔の日本の地名や特殊な読み方、漢字を音読みした奴だったり創作したり。
人それぞれですし、いろいろな意見がありますけどね。
自分は『愛情表現』のために名前を付けます。
俺はお前を信頼してるからお前に名前を付けた、将来お前は輝くだろうから名前を付けた。
そんな脳内補充をしています（痛

さて、いまだにカナタは研究所で缶詰め状態なので（笑）ユウキ君の視点から始まります。

三話　初めての相棒

――――――あのクソ親父……帰ってきたら一発ぶん殴る……。

ゾクッ！！

な、なんだろう、この悪寒は……。
しかも空耳でカナタさんの声が聞こえたし……。
すごい恨みつらみがこもってたしっ……！！

とりあえず、オダマキ博士に会うことがあったら、今は帰らないように言っておこうかな……。

そんなオレは今、１０１番道路に来ています。

なんでこんなところに来てるのか、と言われれば、ただの雑用。
母さんから頼まれて、隣町のコトキタウンまで雑貨を買いだしてきたわけ。

いや、用事は無事に終わって帰ってくる途中なだけだけど。

「た、助けてくれぇ～～～……」

……なんか聞こえた。何かの唸り声も聞こえるし。

周りを見渡せば、その声の主は近くの大木にいるようす。
……なんで分かったかって、木の根元によく知らないポケモンが三

匹、上へ向かって吠えてるから。
三匹とも小さくてかわいいんだけど、口元から覗く鋭い牙が痛そうだ。

それはともかく。

「そ、そこの君ぃ～～……」

あ、オレに気付いた。
とりあえず雑貨を近くの木の根に置いて、ポケモンたちが気付かないように近づく。
俺が近づいたことが分かったのか、木の上の人がまた声をかけてきた。

「わ、私のカバンがそこにあるから、中を探ってくれぇ～～」

木の上から指示を出してくるので、とりあえず言うとおりにすることにする。
ん～、近くに落ちてるカバン……これか、この茶色の。
で、中身を探ってみると、変わった機械とモンスターボールが三つ入っていた。
これをどうしろと。

まぁ薄々感じてはいるけどさ……。

「その中から一匹使って、追い払ってくれぇ～」

あ、やっぱり……。

そう思って、ボールの中身を見た。

モンスターボールは赤と白に分けられていて、赤が上、白が下。上の部分は透明で、中に入ってるポケモンを見ることができる。

三匹とも縮小されてボールに入っているが、多分ボールの外に出しても目の前のポケモンたちと同じくらいの大きさにしかならないだろうと当たりを付けた。

それにレベルも少々心許(こころもと)なさそうだ。

相手にするポケモンはすばしっこそうだし、この中で渡り合うためには、素早さじゃなく一撃を耐える防御力、重い一撃を繰り出すための体格がいると考える。

……うーん、よし。この子にしようか。

決めたポケモンが入っているボールを手に取り、近くに落ちていた枝をポケモンたちに投げつける。

……よし、こっちに注意が向いた。

ただ怒ってるのか、こっちに唸り声をあげてきてる。

三匹同時は面倒だな、とか思ってると、一匹だけ前に出てきた。どうやら、一騎打ちをご所望の様子。

それはそれでいいんだけど、三連戦も正直きついだろうな。

……でも、やるしかない！

「出ておいで！」

そう言ってボールを放り投げる。

するとボールが二つに割れて、水色や青を主体とした小柄な影が飛び出した。

しかし小柄といえども、ボールには入りきらない大きさだ。……何度も見てきた光景だけど、本当に、モンスターボールってどうなってんだろ。

まぁその思考はすみにおいて、戦闘に集中しよう。
技が分かればいいんだけどなぁ……なんて思ってたら、カバンの中に入っていた変な機械を思い出した。
いきなり現れたポケモンを警戒してるのか、なかなか襲いかかってこないポケモンたちに注意しながら、機械を手に取る。
と、いきなり作動音をあげて、機械の表面が開いた。――――――
カバーだったようで、その下には何個かのボタンとその邪魔をしないようにギリギリまで広げられた液晶――――――いや、双方が邪魔をしないように施された、携帯ゲーム機のようなものだった。
と、端っこにある白いモンスターボールを模した部分に触れると、シャッター音が鳴ると同時に画面が点灯して情報を表示し始める。

――――――ふんふん、目の前の三匹は『ポチエナ』という名前のポケモンらしい。シャッター音はポケモンの姿を確認するためのもののようだ。
ついでに自分が出したポケモンも撮影してみると、こちらには『ミズゴロウ』と出た。
さらにありがたいことに、今現在使える技まで表示してくれているようだ。……といっても『たいあたり』ぐらいしかなんだけどね。

まぁ、どうにかなるさ。

と、ポチエナが一吠えして、ミズゴロウに飛び掛かってきた。ゆっくりしてる場合じゃないね。

「ミズゴロウ、かわして！」

一声鳴いて返事をすると、横っ飛びをしてポチエナの攻撃を回避する。

ポチエナは前足から軽やかに着地。見積もった通り、身のこなしは軽いようだ。

「ミズゴロウ、たいあたり！」

鳴いて答えるとミズゴロウはたいあたりを繰り出すが、ポチエナは軽くかわすと、逆にたいあたりをミズゴロウに当てる。
それほどダメージは食らってない様子。なら、まだ行けるね。
でも相手に躱(かわ)されっぱなしじゃ、埒(らち)があかない。

じゃあどうしよう……よし、こうしよう。

「ミズゴロウ、そこで待機して」

ミズゴロウにその場にとどまるよう指示。
意図は分かってないながらも作戦の一環であることに感づいているのか、ミズゴロウはその場にとどまり、体の方向だけはポチエナに向ける。
自分の攻撃が当たったことに味を占(し)めたのか、ポチエナはもう一度たいあたりを仕掛ける。

半分飛び上がりながら、重力を味方に付けてのたいあたり。
食らえば結構な打撃になりそう。……でも！

「今だ！　たいあたり！！」

空中にいたんじゃ、飛行ポケモンでもないと避けられないでしょ？

ゴツッ！　と鈍い音がして二匹ともフラフラとよろめくが、先に倒れたのはポチエナの方だった。

やっぱりスピードがある代わりに防御力や体力面はあまりないようだ。
それに、オレがカウンターモドキで一発当てたのは、全部倒すためじゃない。

……ほら、気絶した一匹を除いて、文字通り尻尾を巻いて逃げてしまった。薄情だなぁ。
なんにせよ危険がなくなったと判断して、木の上の人に声をかける。

「いなくなりましたよー」
「あ、ありがと……うわっ！！」

あ、木の枝から滑り落ちちゃった。
けっこうな高さからだったけど……。

「あいたたたぁ～……」

……大丈夫っぽい。

「大丈夫ですか？」
「いやぁ～、うっかり彼らのテリトリーに足を踏み入れちゃってね。追いかけられて木に登ったは良かったんだけど、カバン落として対抗手段を無くしてたんだ」
「いや……木から落ちた方なんですけど……」

俺の心配とは別のことを話す男の人に言ってみると、

「フィールドワークにはこのくらいのことは当たり前なんだよ」

そういって豪快に笑われたら、なんかそんなことを心配したオレが

馬鹿らしくなってきた……。

「そういえば、なんであのポケモンたちは逃げ出したのかな？」

「ああ、それはこれに書いてあったんですよ」

二匹が退却したことに不思議がる男の人に、機械を使ってポチエナの項目を呼び出し、見せる。

「『動く物に対してしつこく噛み付く習性を持つが、反撃されると尻尾を巻いて逃げ出すなど気の弱い部分も併せ持つ』、か。だから逃げ出したのか」

「はい。だから挑みかかってきた一匹を倒せば、あとは逃げるんじゃないかと思ってました」

もっとも、この機械を持ってなかったらごり押ししてたかも。

……それにしてもフィールドワークしてるって言ってたな。カナタさんもフィールドワークが主な仕事だって言ってたけど、この人も研究者だったのか。

カナタさんとも知り合いだったりするのかな？

「あ、そうそう、私の名前はオダマキだ。オダマキ博士って呼ばれてる」

……はい、思いっきり身内でした。

それにしても、白衣に半ズボン、サンダルのような履物をはいて頭はボサボサ、揉み上げ付近から顎にかけて無精ひげが生えてるこの人が、あのカナタさんやハルカの親だとはちょっと思えないな。

でも失礼だから口にしない。

「本当にありがとね」

「いや、帰る途中でしたから、何でもないですよ」

そう言いながら、ほったらかしてた雑貨を抱えると軽く会釈をして帰ろうかと思ったんだけど。

「いや、お礼がしたいから、研究所へ来てくれないか？」

「……えっ」

いやでもあの悪寒がよみがえる。なぜかと言えば、カナタさんの今後の予定を知っていて、研究所にいることは分かっているからだ。部屋で話していた時も、カナタさんから愚痴のように「消えたら困るのに放浪癖持ってる」、「親父がいなけりゃ迷惑を被るのは俺たちだ」など、博士がいなくなってた場合の苦労も聞いていた。そしてその「消えたら困る」本人がこんなところにいる。

……なんとなく研究所に行きたくない……。

いや、怒られるのは博士だけだと思うけど、それでも行きたくない……。

でも他人の頼みをむげにできないし、オレはそのまま研究所へついて行った。

どうかカナタさんの怒りが収まってますように、と祈りながら。

十分ほどで研究所の到着。

……なんか、ものすごく負のオーラを感じます。

そのまま研究所の扉を開けるオダマキ博士。

能天気に

「ただいまー」

なんて言ったものだから、

ゴスッ

「ウゴッ！」

「どこほっつき歩いてやがったんだ、このクソ親父ィ！！！」

頭に青筋を浮かべたカナタさんの怒声と、顔面への辞書並みに太い本――ちなみに角――の直撃がお出迎えしました。

――――――――――――――――――――――――――――――――

どうにか目途（めど）がついてきたころ、

「ただいまーー」

なんて声が聞こえたので、手近にあった『ポケモンの生態』（６００ページ超）を全力で叩き込んでやった。

「どこほっつき歩いてやがったんだ、このクソ親父ィ！！！」

後ろにいたユウキ君に当てなくてよかった、と妙に冷静な頭が語る。ちなみに頭の中に親父を心配する声はない。どうせ復活するから。

「あいたたた～……」

ほらね。

「何を怒ってるんだい、カナタ」

てめぇが原因の9割じゃ、放浪癖。
後ろで苦笑いを浮かべていたユウキ君の顔色が段々青褪(あおざ)めてくる。
そらそうだ。今の俺は鬼みたいな形相をしてるだろうからな……。

「あの、理由あってのことですし……」
「君の証言は後で聞くよ、ユウキ君」

笑みを浮かべながらドスを効かせた声でユウキ君の発言を封殺し、
親父に詰め寄る。

……さぁ、事情聴取といこうじゃないか？

～30分後～

「フィールドワークの基本は現場の状況確認だろ。むやみやたらに入ってくからそうなったんだよ。ちょっとは反省しろ」
「いや～、けっこう生態系に変化があったから、居ても立ってもいられなくてね……」
「仕事終わってからでも良いだろ!!　生態系は1日やそこらで変わらねーんだからよ!!!」
「そんなこと言ってたら、重大な変化に気付けないだろう？　そうなったら学者としての名が廃る!!」
「それをまとめるデスクワークやんねーと、なんか見つけたって報告も何もできねーだろ!!!　学者云々(うんぬん)以前に人間としての名が廃るぞ!!!!」

俺は説教していた。
何が悲しくて一回り二回り離れた実の親を説教せにゃならんのだ。

ちなみに親父が襲われてた時間帯は、ユウキ君が通りかかる直前。
長い間木の上にいたわけじゃなかった。
つまりユウキ君が助けなければ、俺の労働時間や負担がさらに増えてたことになる。
ありがとう、ユウキ君。

ちなみに、

「それにしても、本当に良いんですか？　ミズゴロウ、もらっちゃって」
「良いんだよ。言ったでしょ？　お礼だって。それに、初心者用のポケモンだから扱いも簡単なはずさ」

ミズゴロウはユウキ君の手持ちポケモンとなっていた。
なんでも、持ってた三匹の中で一番なついてしまったんだとか。
まぁユウキ君も満更（まんざら）でもなさそうだし、大切に育ててくれそうだ。

「俺からも、そいつをよろしく頼む」
「はい、しっかり育てます」

うん、良い返事だ。

ユウキ君はまだ家の手伝いが残ってるそうなので、ここで帰ることとなった。
そして俺は、仕方ないので一段落するまで親父を手伝うことに。

もちろん、比重は親父の方が圧倒的に多い。
本当は全部押し付けたかったが、今日は我が家でセンリさん一家の歓迎パーティがある。近所の奴らも何人か参加するらしいし、親父と言えどもほっとくのはかわいそうだ。
助手二人もパーティに招待することで手伝ってもらってる。

「……賑やかになりそうだな」

などと一人ごちれば

「ん？　さっさと手を動かせよ」
「そっくりそのまま返すぜ、親父」

……さっさと終わらせるか。

そして夕刻。

『ようこそホウエンへ！　ようこそミシロタウンへ！！』

クラッカーの音とともに、この場に集まったみんながセンリさん一家に向けて、言葉を贈る。
と同時にこれは、パーティ開始の合図だ。みんなおもむろに行動しはじめる。
うちには結構広い庭があるし近くにはユウキ君の家ぐらいしかないので、主な目玉は庭で行われるＢＢＱだ。

もちろん家の中にも、母さんが腕によりをかけて（そしてハルカやユウキ君のママさんも手伝って）作った料理が並ぶが、案外人が多く集まってしまったので、急遽バーベキュー用のコンロや肉、野菜などを調達して、バーベキュー大会を開くことになった。
家の中のものに手を付けてるのは、親父とセンリさん、母さんとママさん、ユウキ君とハルカ、あとは俺と食いしん坊の末っ子、マサトぐらいだ。
あとはハルカの友達がユウキ君に自己紹介してたり、大人が準備しているバーベキューを心待ちにしているちびっ子たちがいるぐらい。
俺がけしかけて、ユウキ君と同年代の男衆もユウキ君に声をかけている。

と、ほとんど準備が終わったのか、大人たちがコンロで肉を焼き始める音がする。
その音を聞きつけ、子供たちが我先にと庭へ駆け出した。こけたりコンロ倒したりするなよ～。
大人たちは喉が渇いて来たのか、すでにビール缶を開けてるし、ちびっ子たちもクーラーボックスに入れてあるジュースを手に取り、蓋を四苦八苦しながらもあけて、大人のマネをして飲みだす（飲み終わって「プハーッ、生き返る～っ」みたいな）。

家に残ったのは、昔話に花を咲かせているのだろう飲み合ってる親父とセンリさんと、気が合ったのか
おしゃべりに興じる母さんとママさん。ユウキ君とハルカもいるな。
マサトはちびっ子たちに連れられて、バーベキューの方に行ってる。

……そーだよ、俺は一人寂しく酒も飲めずに料理をパクついてるだけさ。

いや、彼女は実はいる。けど、ぶっちゃけ都合があって、そう名乗

ってるだけなんだよね。
だから、本当の意味での『恋人』はいないんだよね、これが。
で、その『彼女』っていうのは

「カナタさん、お久しぶりです」
「おう、前に旅先で会った以来だな、ソラ」
「……転生先に順応できたようで、何よりです。……ごめんなさい」
「……はぁ、またか」

俺の魂を取り違えて、俺が転生することになった原因の張本人の『天使』だったりする。
だから顔を合わせるたびに、こんな風に謝罪の言葉を述べてくるけど、正直俺はこの世界に来れて良かったと思っているので、この『ソラ』が謝るのは筋違いだとも思ってる。
まぁ原因作っちゃったしかなり怒られたしで、罪の意識を持つな、と言われても無理だろうとも思う。

それでも

「俺はこの世界に来れて良かったぜ？　むしろ感謝してんだよ。だからもう謝んなって」

特にこいつを恨む気は起きない。
だから、逆に感謝の言葉を返す。

「でもっ……」

……女の子の涙目は卑怯ですよ、ソラさん。

「気にしてないって言ってんだろ。気楽に行こうぜ。俺を今度は正

式に送り届けてくれるんだろ？　なら今は肩の力を抜いて、まだ楽しもうぜ」

そう言って、椅子を引いて席を用意する。
ソラは渋々、といった様子で座り、渋々といった様子で料理をパクつき始めた。
だがその渋い表情も、料理をパクついてるうちに徐々にやわらかいものへと変わっていく。
その様子にちょっとホッとして、ユウキ君とハルカの方を見た。

「これ、食べてみて！　ママの自信作！！」
「へぇ、すごくおいしそうだ……うん、おいしい」
「えへへぇ～。こっちも食べてみて！」
「あ、こっちもおいしい！」
「……よっしゃッ！」

ハルカが小さくガッツポーズした。多分、ユウキ君に食べさせてるのはハルカが作ったものなんだろう。……ほう、ハルカが積極的になってるな。
ハルカは料理が得意だし、俺と違って片付けもできる。母さんに言わせれば、『いつでもお嫁に出せるわ』とのことらしい。
まぁハルカも親父の放浪癖を受け継いだらしく、一か所に留まることがあまりできないし外で遊ぶ方が好きらしいから『主婦』にはなれないだろうな。

と、俺も食うか。

一時間くらい経ったか。

もうすっかり日も暮れたし、初夏に入りかけた季節なので、あとは近くの河原で花火でもしようという話に。
俺はソラもつれて、ちびっ子たちの安全を確認しながら河原へ向かう。

到着した河原で、さっそく綺麗な光が瞬きだした。
子供たちの楽しそうな声をＢＧＭに、俺は坂に寝っころがって夜空を見上げる。ちなみにソラは花火が珍しいのか、子供たちと一緒に騒いでる。楽しそうで何より。

今日は綺麗に晴れて、目の前には天の川の大パノラマ。
田舎のいいところは、ふと思い立った時にきれいなものが見られるところなんだろうな。前世では、こんな夜空を見た記憶もない。

ふと、近づいてくる足音が聞こえた。
その方向を見ると、ユウキ君がこちらに向かってくる。
ユウキ君も隣で座りこむと、ゆっくりと口を開いた。

「……綺麗ですね」
「ああ、都会じゃまず見られないぜ」
「……このホウエンは、どんなところですか？」

フィールドワークをやってる俺に、ホウエンのことを聞くのか。
ふむ、そうさなぁ……。

「……広いな」
「広い？」
「ああ。分かったつもりがまだ分かんないことがあったり、まだ見たこともないような場所もあったり。
とにかく、何があるか分からないくらいに広い。俺たち人間がちっ

ぽけに見えるくらいにな。これで、まだ世界には他にもいっぱいあるんだから、気が遠くなりそうだ」

「……」

「……見てみたいか？」

「えっ？」

「このホウエンの……いや、この世界の果てを」

さすがに言いすぎかな、と思ったけど

「……そうですね。見てみたいです、世界の果て」

なんて答えが返ってきた。

『少年よ、大志を抱け』って誰か言ってたな。

なら、俺は大きな夢を持つ奴の手助けをしよう。足場が無ければ、誰も飛び上れない。

「でもまだホウエンでさえ分からないことだらけなので、まずはホウエンから……旅をしたいです」

「親御さんの了解ぐらいは取っとけよ」

そう言って、草を払いながら立ち上がり、ユウキ君の方を向いた。

「ようこそ、大冒険の世界（ポケットモンスター）へ」

俺の差し出した右手を、ユウキ君はしっかり握り返す。

彼の旅が、これから始まる。

三話　初めての相棒（後書き）

あ～疲れた……
皆さんも、読了お疲れ様です。
長ったらしくなってすみません……

次はユウキ君の旅立ちについて書く予定です。スローペース乙……
ｏｒｚ
そして、そこで第一章は終了です。その後は人物紹介を挟んで第二章へとなります。

……ぶっちゃけ、一章終ったらどうしようか決めてな（殴
まぁ、どうにかします（滝汗

四話　少年、旅に出る（前書き）

第一章最終話です。
ついにユウキ君が旅に出ることになります。
それにしてもこの後どうしよう……何も考えてｎ（殴蹴

四話　少年、旅に出る

ユウキ君が旅立ちを決意した日からすでに二日ほどたった。
そしてこの日、ユウキ君は旅立つ。

ってか早いな。まだミシロに来て三日ぐらいしか経ってないじゃん。
まぁ思い立ったら吉日ともいうし、俺がけしかけたのもあると思うんだけど。

ちなみにユウキ君はすでに旅に出ることは許可されてるし、この二日間は旅に出るときの準備に費やされた。
小さい頃、センリさんとたまに二人だけでキャンプをして、自炊や野営の仕方を学んだらしい。
そんな事を小さいうちから仕込んでたってことは、センリさんもいずれユウキ君が旅に出るってことに薄々感づいてたのかもしれない。

実際、１０歳を過ぎたあたりから旅に出る子供は少なくない。
通過儀礼、とでもいうのだろうか。一人で全国各地を、自らの足と供となるポケモンたちの力を借りて巡り歩くことで、子供の自立心や自主性をかなり養うことができる。

まさにことわざの如く『かわいい子には旅をさせよ』。この世界で『人格者』として知られるものは皆、幼い頃に一人旅を経験している者がほとんどだ。

もちろん旅に出ない子供もいる。
代表的なのは、持病や体質などで旅をする体力のない病弱な子供たちだろう。

しかし実は、これは旅をしない子供たちの約２５％ほどにしか過ぎない。
残りは何かと言えば、いつの時代もいなくなることのない、過保護な親の元に生まれた子供たちだ。
『危ないから』『何があるか分からないから』『別に旅などしなくても、この子は立派に育つから』などと言って、子供を自分の手元に置きたがる親たちだ。
そんな親元（おやもと）の子供たちは、自由に外の世界を旅する旅人達に憧れる。
この世界の子供たちにとって、『旅人』とは憧れの存在だ。
そんな存在に、ユウキ君はなろうとしている。
……そして俺は知っている。ユウキ君が、憧れる以上の存在になることを。
いずれ、この地方に知らない者はいない、というくらいの存在になることを、俺は知っている。

ユウキ君は今、荷物を持ってミシロから世界への入口へとなる１０１番道路の前にいた。

見送りは、俺と親父と母さん、そしてユウキのママさん。
センリさんはジムの仕事で忙しくて、どうしても来られないらしい。
少しくらい暇を取ればいいのに、と直接言ってみたら、

「旅に出る前のユウキはもうずっと見てきた。いまさら見たところで変わらない。もしユウキがトレーナーとして私のいるジムに来たときは、一人前となったその姿をしっかり目に焼き付けるさ」

自分のジムに挑戦できるほど力を付け、なおかつ自分を倒せたら一人前だ、と言っているのだ。

なるほど、センリさんもワクワクしてるのかもしれない。ユウキ君がどんな人間になって『父親』という、男にとっての人生最初の壁を乗り越えるのかを。

あとハルカがこの場にいないのは、親父が見送りに出るためにフィールドワークを肩代わりしたからだ。
確かこの先のコトキタウンの北、１０３番道路にいたと思う。
そのことはすでにユウキ君に伝えてあるから、旅に出る途中であいさつしに行くだろう。

さて、そろそろ出発のようだ。

「それにしても、よくなついたな、そいつ」
「あの後、手当てをしたのを恩に感じたみたいですよ。どうも義理堅い性格のようです」

ユウキ君の足元にじゃれ付くポチエナを見ながら、そんな会話を交わす。
このポチエナは博士を襲った三匹のうち、ユウキ君に挑みかかった奴だ。
気絶したところをユウキ君が介抱してやると、どうも優しい人柄が気に入ったのか、すぐになついて手持ちの一匹となった。

なんにせよ、仲間が増えるのは良いことだ。
というわけで

「ほい」
「え？　なんですか？」

ユウキ君に一つの包みを渡す。
まぁ、俺からのささやかなプレゼントだ。

「あ、モンスターボール……」
「手持ちは六匹までしかダメだけど、一応五つ入れといた」
「いえ、とてもうれしいです！　大事に使います！」

ちなみにこれは俺からのプレゼントだが、ママさんからも『ランニング・シューズ』をプレゼントされ、親父からはなんと

「はいこれ」
「あ……これ、あの時の……」
「これは『ポケモン図鑑』だよ。出会ったりゲットしたポケモンの記録の詳細なデータがすべて詰まってる。君なら、これを有効活用してくれるはずだ」
「あ、ありがとうございます！！」

ホウエン地方専用のポケモン図鑑が手渡された。
これはカントー地方の有名な博士、オーキド博士が最初に作ったカントー地方版『ポケモン図鑑』を参考にして開発された、ホウエン地方にたった三台しかない貴重なものの一つだ。

図鑑は多機能なハイテク機器で、情報の収集から戦闘の補助まで何でもこなし、防水性や耐衝撃性も全く問題なく、水の中だろうが空の上だろうがどこでも使える画期的なデバイス。
もっとも、それだけ高性能であるということはコストもバカにならず、量産化が難しいので三台しかないのだ。

ユウキ君に渡したやつ以外の残りの二台は、俺とハルカが持ってる。
親族、というのもあるが、俺たちが若くしてホウエン地方の研究に多少なりとも貢献しているからだ。

ちなみにイメージ的にはアニメ版のポケモン図鑑みたく、すでにほとんどのポケモンの記録が入っている状態。
これは俺たちの功績が大きい。ポケモンを見つけて発見済みか未発見かを確認し、未発見なら調査をしてデータを作り、研究所に持ち帰ってそのデータをインプットする。
この地方に伝わる伝説のポケモン以外は、けっこう網羅してるはずだ。

あ、そうそう。『ポケモン図鑑』に説明文ってついてるじゃん。あれ、俺たちが書いたことになってるんだぜ。
これが、俺たちの主なフィールドワークの内容だったりする。
今回ユウキ君には、俺たちが発見し損ねたポケモンを発見してもらい、ゲットなどをしてデータを取ってもらう意味も含めてポケモン図鑑を渡した。
……俺の記憶が正しく、順調にいけば伝説の三匹のポケモンのデータも取れるかもしれない。
レジ三兄弟については、俺がどうにかしようか。

さぁ、準備は万全かい？
忘れ物はないね？
ここからはユウキ君の力だけでどんな困難も乗り越えていかなければならない。
もちろん、手助けができればオレたちは手助けする。でも、いつで

もどこでもできるわけじゃない。
でも、それこそ冒険なんだ。

さぁ行ってらっしゃい。
がんばって、なんて言わないよ。君はいつでも一生懸命、頑張るはずだから。

君の行く末に、幸多からんことを

――

第一章　『かわいい子には旅をさせよ』　完

四話　少年、旅に出る（後書き）

おお、眠い眠い……ＺＺＺｚｚｚｚ
朝の４時くらいから書いて、一旦消して６時ぐらいからこんだけ書きました。
なのでテンションがおかしいです。

予定通り、次は登場人物の紹介になります。
そのあとは……どうしよう、何も思いつｋ（蹴
どうにか無い頭ひねりだして考えます。

お休み……（ぉぃ大学
あ～めんどくせ～。でも試験あるし課題あるし……やだな～

言っても無駄ですよね。腹くくりまして行ってきます。
では～ノシ

登場人物　紹介

宣言通り、今回は登場人物の紹介をしたいと思います。イエーイ！
（パフパフドンドン（古

なお、転生した主人公こと『カナタ』が多少優遇されてる感がありますが、そこはそれ。『ただ転生させただけじゃ、うまくいくとも限らないだろう』と考えた神様によって、多少は前世より良い目が見られるように、との配慮の末です。
……と、ご解釈ください（汗

なお、ユウキ君はオリジナルでは帽子だそうですが、帽子の下がセンリさんというのはやだなぁ、なんって思ったので、銀髪にすることにしました（ＮＯＴ　白髪

では、紹介に移ります。
ちなみにオダマキ博士の下の名前、センリ一家の名字、そして両家のママさんの名前は不明にしてあります。
変に決めると、こんがらがりそうなので。原作のイメージも大切にしたいし（すでに壊してるとか言っちゃらめぇ

オダマキ・カナタ
男　１６歳（前世では１９歳だった）

身長は１７５センチほどで、筋肉質ではないがフィールドワークで体が鍛えられているので、けっこう力持ち。

妹のハルカと同じく亜麻色の髪と蒼い色の目を持つ。
髪は癖のない髪質で、ショートヘアーにしている。
そこらの男よりは顔が良い。
脛あたりまでの緑色のカーゴパンツと黒い無地のTシャツを愛用している。

今生きている世界で16年、前世で19年も生きてきたので、精神年齢はけっこう高く、相談事にもよく乗る。そのため、同年代の少ないミシロタウンでは7歳ぐらいから十代前半の子供たちの兄貴分として親しまれている。しかし何か彼の琴線に触れることがあると、途端に感情をあらわにする。
結構なお人好し。
『彼女』がいることになってるが、それは『彼女』の正体を隠すための建前でフェイク。

ポケモンは六匹フルで持っているが、用があるとき以外は基本的に呼ばないし、たまに変動する。ただ、移動するときは空を飛べる「クロバット」を使っている。

呼称

父、母→「カナタ」
ハルカ→「お兄ちゃん」
マサト→「おにーちゃん」
ユウキ→「カナタさん」
センリ夫婦他大人→「カナタ君」
その他モブキャラ→「カナタ兄(にい)」

ユウキ

男　１１歳

身長は１５０センチほど。１１歳の少年にしては、よく鍛えられている。
目を引く頭の銀髪は先祖返りしたもので、なかなか綺麗なのだが、どうしても『白髪』に関連するワードに敏感に反応してしまう。
瞳の色は、炎のような紅。髪は緑のヘアバンドで留めている。
まだ幼さが残っているが、将来は光りそうな顔だちをしている。
姿恰好はエメラルドバージョンと同様。緑とオレンジがホウエンでブームになっているので、乗っかってみたらしい。

素直で正直者だが、空気も読む。人の頼みを断れないお人好しで優柔不断。
あと少々鈍感で、異性からのアプローチをよくスルーしてしまう。
年の割に落ち着いており、周りをよく見るので、ツッコミ役に回ることが多い。おかげでカナタがボケもやるようになった。
謙虚な性格とその顔立ちから、年上、特に５つ６つくらい上の『お姉さま』たちに人気。
ほぼ勢いでハルカと友達となったが、友達ができたことは素直に嬉しいらしい。

手持ちは二匹で、二匹ともにニックネームを付けている。
ミズゴロウの「ロー」と、ポチエナの「エナ」。

呼称

センリ夫婦→「ユウキ」
その他ほぼ全員→「ユウキ君」

オダマキ・ハルカ
女　１１歳

まだ大人の色気はないが、健康的で年相応の瑞々しさを持つ身体つきをしている。
兄のカナタ同様、亜麻色の髪と蒼い目。
やはり女の子らしく、髪には気を使っていつもサラサラ。
美人系の顔立ちではないが、ユウキ曰く「ひまわりのような」笑顔は、万人の心を癒すオアシスになる。
格好は原作と同じ。

年相応に、好奇心旺盛。少々我侭（わがまま）なところもあり、よく周りを巻き込む（主な被害者…ユウキ、カナタ）。
一言で説明するなら、天真爛漫（てんしんらんまん）。
色恋沙汰は、やはり女の子というべきか、かなり敏感。フィールドワークのついでにショッピングをしたり町で情報収集をしたりして、ミシロの女の子たちの情報源としても活躍している。
若干空気が読めず、場にそぐわない発言をしては周りを凍りつかせることも多々ある。

手持ちは原作通り。一章の時点では、まだキモリ一匹のみ。遠くへ移動する際は、カナタや博士のポケモンを借りている。

呼称

父、母、カナタ、ユウキ→「ハルカ」
マサト→「おねーちゃん」
女友達→「ハルカ・ハルカちゃん」
男衆→「ハルカちゃん」

オダマキ博士
男　３０代後半

長年研究で旅を続けてきたためか、歳の影響で出てきたお腹以外は案外衰えてない。
髪の色は亜麻色で、髪質以外は子供たちが継いでいる。
格好は原作そのまま。

カナタ曰く「放浪癖」と言われるように、研究所に閉じこもるのが苦手で、研究所を抜け出しては助手二人とカナタに迷惑をかけ、帰ってくるとまずカナタに説教される（武力的に）。
ある意味空気の読めないところはハルカが引き継いでしまったのだろうが、学者としては優秀で、『ポケモン図鑑』のホウエンバージョンを開発したのもこの人。

手持ちにしているポケモンはあまりいないが、移動のための飛行ポケモンを持っている。

呼称

カナタ→「親父」
ハルカ、マサト→「お父さん」
奥さん→「あなた」
センリ→「オダマキ」
他多数→「オダマキ博士」

オダマキ・ブラザーズのママ
女　３０代後半

オダマキ博士と結婚した、すごい人。
髪の色は黒で誰も継いでないのがちょっと悲しいが、髪質は上二人が継いでくれたのでちょっとうれしい。
３０代の割に美人。
オダマキ博士も、この人には頭が上がらない。
ポケモンに詳しいわけではないが、毛づくろいなどをポケモンたちにすると、とても喜ぶ。

ポケモンは持たない。

呼称

カナタ、博士↓「母さん」
ハルカ、マサト↓「お母さん」
その他多数↓「カナタｏｒハルカのママさん」

センリ
男　３０代半ば

ジムリーダーとしてホウエンに赴任してきた。
結構ストイックな性格で、己を精進させるためにミシロからトウカまで徒歩で毎日通っている。
ユウキが旅をすることを許し、むしろいつか自分のジムに挑戦することさえ約束させた。
少々子供っぽいところもあり、ユウキのママさんから諌められることもたまにあったりする。
ただバトルは強いが、肉体的強さも半端ない。リンゴを素手で潰すのも朝飯前だとか……。

手持ちは原作通りノーマルタイプのメンバー。実力は折り紙つき。

呼称

ユウキ→「父さん」
カナタ、ハルカ、その他諸々→「センリさん」
博士→「センリ」

ユウキのママ
女　３０代半ば

ジムリーダーの嫁になった美人さん。
実はセンリより年上。姉さん女房としてジムリーダーとして働くセンリを支える。
ユウキの旅には、不安を感じながらも承諾。「子供はお外で遊んで、怪我して帰ってくるぐらいがちょうどいい」と、ユウキにいつでも帰れる場所があることを告げている。
オダマキ家のママさんとはママ友。
同世代の子供を持つ者同士だからか、よく気が合い、よく飲みに行く。

オダマキ家のママさんと同じく、ポケモンは持たないが、彼女の膝枕はポケモンも熟睡して全開になるらしい。

呼称

ユウキ、センリ→「母さん」
その他→「ユウキ君のママさん」

オダマキ・マサト
男　９歳

黒髪で父親と同じく癖っ毛。
将来はオダマキ博士のように、ではなく普通にポケモンの博士になりたいらしい。
ちなみに「おとーさんみたいになりたくない」と言われた瞬間、博士は自室に丸一日ひきこもった。
背格好はアニメ版のマサトのメガネを外したような感じ。
ミシロの年少組のお守役。

自分のポケモンを持って旅をするのが夢。

呼称

ほぼ年上全員→「マサト」
年下→「マサトにーちゃん」

ソラ
女　？歳

「カナタの彼女」として知られているが、正体は、前世のカナタの魂を取り違えた『天使』。すでに数百年は生きてるが、人の何十倍という時間を生きる『天使』にとってはまだまだ子供らしい。
外見年齢はカナタと同じ位。
薄い蒼の長髪をポニーテールにしている。瞳の色は鳶(とび)色。
ハルカと同じく美人系の顔立ちではないが、身長１４０センチ後半

ということも相まって、どことなく小動物を思わせる愛くるしさがある。
カナタから気にするなと言われていても、取り違えたことに罪悪感があるらしく、顔を合わせるたびに謝る。
涙もろく、小さなことも他人のことも、自分のことのように感動する。
青い上着にハーフパンツと、行動しやすい軽装を好む。
ちなみに、この世界に来たときにはすでにこの格好で、カナタに会った時から年相応に外見を変化させ始めている。
今度は間違いなく、取り違えずに『神』のもとに送るとカナタと約束している。

この世界のルールに準拠し、移動は手持ちのポケモンで行っている。
六匹すべて持っており、レベルもそれなりに高いが、ソラ自身が争いを好まない性格なのでバトルの経験は少ない。

呼称

カナタ→「ソラ」
ハルカ→「お姉さん（お義姉さんでも可）」
マサト含む子供たち→「ソラねーちゃん」
その他大人→「ソラちゃんｏｒカナタ君のとこの」

一章で出てきた主要人物はこのくらいですかね。
ソラの出し方は少々強引だったかと思いましたが、二章で出すとまたグダリそうだったのでちゃっちゃと消化しちゃいました。
さて作者が何も考えてない第二章ですが、もちろんカナタ目線でお送りします。

間が空くかもしれませんが、どうにか完結できるように頑張ります。

ではっ！！

五話　カナタ、夢を見る（前書き）

基本的なスタンスは、ユウキ君はストーリー本編を、カナタは裏方となってユウキ君を支えるために奮闘します。

あ～、やっと書き終わった。
書き上げるのに1週間とか……しかもほとんど夜中にやってるから頭が働かねぇ……。

どうにか第二章を始められそうです。
お楽しみに。

では、本編へどうぞ。

五話　カナタ、夢を見る

……よぅ。カナタです。

今現在、俺は夢を見てる。

……自覚してんのにまだ夢が続いてるなんて、不思議な感覚だ。

こういうのを白昼夢、とか言うんだろうか。

で、どんな夢かと言えばけっこう最近の夢だ。

時間にすれば一ヶ月ほど前かな。

俺とソラが出会った時の夢。

よほど強烈なことだったのか夢によくある脚色もほとんどなく、俺が記憶していることと寸分も違わない話を、ちゃんと順序良く見てる感じ。

しかも前に何度か見たこともある。

と言っても、嵐のような話だったけどな。

一か月前、俺が長期に渡って実施していたフィールドワークを終えてミシロタウンに帰った時のこと。

研究所でレポートを無事提出して、家に帰って旅の疲れを癒(いや)そうかと思っていたときに彼女は現れた。

「あの……――――――さんですか？」

「えっ」

呼ばれた名前は、俺の前世での名前。
でもその時でさえ言われてどうにか思い出すほどに忘れかけてたし、今となっては何と言われたのかさえ記憶にない。
そのことを自覚した時、何となく寂しかったが切り替えた。俺が生きる世界はここなんだ、って。
だから前世の名前も、今の俺には関係のないことだと思うことにした。

でもその時は、そこまでたどり着いてなかったから慌てたな。

「なんで、その名前を知ってんだ？」
「……わたしが、取り違えた張本人だからです……グスッ……」

そうそう、あいつ、あの時いきなり泣き出したんだっけ。
しかも、話してる場所が家の真ん前。
もちろんだが、ユウキ君たちがまだいない頃。他の町の人たちの家から離れたところにあるとはいえ、自分の家の玄関先で泣かれたんじゃ後々どんなことを言われるのかわかったもんじゃない。

なので家に上げることにしたんだが、俺んちは玄関とリビングが短い廊下でつながってる程度でほぼ直結してる。しかも裏口もない。
さらに間の悪いことに、リビングにはまだ母さんたちが寛(くつろ)いでいたんだが、帰ってきたばかりの俺が知るはずもなく、泣いてる女の子を連れた俺、という最悪の状況を家族に見られた。

もちろん上がってくるのは俺への非難。

「あらカナタ。女の子を泣かせて、そのまま連れ込むなんて良い度胸してるのね」

「おにーちゃん最悪ー。どこで引っかけたのか知らないけど、自分の行動にはちゃんと責任持ちなさいよねー」
「……おにーちゃん、どんなことがあっても、女の子は泣かせちゃダメだって、ポケパンマンが言ってたよ……」
さらに続く俺への罵声が前方から三方向。そして後ろには泣いてる『天使』。
……あの時ほど『四面楚歌』という四字熟語が当てはまる状況はなかったな。確かにマジで逃げ場が無かった……。
どうにかして切り抜けなければ……さいわい、『天使』の方は特に突っ込まれていないので適当に設定を捏造することにした。
……どうせ俺が悪者扱いされてんだ。
なんで『天使』がいるのかは知らないが深く探られてボロが出ても困るだろうし、こいつのためにももう少し泥を被るか……。
そう思って口を開いた。
「あ～……俺の彼女だよ……。別れようって言ったら泣いちゃってさ。俺がミシロ出身なのは教えてたから、探しに来たんだと思う」
こんな事をのたまえば、火に油を注ぐのと同じ。
さらに前方からの罵声がひどくなることになったのだが。
「理由もなく別れよう、って言ったの？　お母さんはそんな薄情な子に育てた覚えはないですよ。彼女がいたことは驚きましたけど。子供はいつの間にか成長するものね」
「やっぱりおにーちゃんサイテー。女の子の気持ち、全く分かってないんだから！　でも彼女がいたのはびっくり。あんがい奥手の癖に」
「おにーちゃん、彼女さんがいたんだ……意外」

マサトに至っては非難でさえなかったな。そしてハルカ、お兄ちゃんは奥手じゃない。ただ異性がちょっと苦手なだけだ！！
……でも、ぶっちゃけ泣いてることに関しては、俺のせいでは無いんだけどなぁ。
むしろこいつのせい。
で、自分を責める意味で泣いてたのかね。まぁそれは今でも変わらないんだがな。

ここで押し問答しても埒が明かないと判断して、俺の部屋への逃げ切りを図る。
手段としては、その『天使』の手をつかんで階段へ一目散。
いきなり手をつかまれて『天使』はびっくりした様子で、しかし俺のなすがままに引っ張られてた。
後ろからは家族の制止の声はなかったが、『ちゃんと話し合え』と三者三様に言われた。
……何を話し合えばよかったのか、今でもわからん。

階段を昇って二階の奥にある俺の自室に、『天使』を連れ立って入る。
部屋も――――今よりは――――片づけられてたけど、十分汚かった。
片付けは定期的にやらないとな。……出来ないけど。

……今にして思えば、俺もなかなか大胆なことしたなぁ。
女の子を部屋に連れ込むとか。
まぁあのときは、俺も正常な判断ができなかったしな。

んで、いまだに涙目の『天使』に、この世界にいて俺を探していた説明を求める。

俺が特に怒っていないことや、なるだけ優しく声をかけたのが功を奏したのか、『天使』は幾分か落ち着きを取り戻して話し始めた。
けっこう長い話ではなかったが、要約すると

・初仕事でテンパり、『死にかけていた』俺の魂を回収してしまった
・そのせいで上司にこっぴどく灸をすえられ、存分に反省した。
・そして俺が転生すると知った時、謝るため、そして二度と取り違えないように俺の魂を持って帰るため、この世界へときた。

と、こういうことらしい。
俺が頭で整理してる間にも、また彼女は涙目になる。どうも本気で申し訳ないことをしたと思っているらしい。
今の俺もそうだが、この時の俺も、『謝らなくていいのに』と思っていた。
この世界は気に入ってるし、人生を最初からやり直して、最初っから真面目にやれてる。今、元の世界に戻してやると言われても、俺は速攻で首を横に振るだろう。
そんな自信もあった。
そのことを素直に伝えると、

「でも、それは今のうちだけかもしれません」

なんて言われた。

曰く、さらに年月が経つにつれて前世と現世の間でのギャップがひどくなり、体と魂の調和が崩れて自分自身を保(たも)てなくなることが結構あるそうだ。
そのため、そのような気配を見せた魂は前世の記憶を消すことで調和を回復しているらしい。

「で、そのが俺に兆候が出たわけ？」
「あ、いえ、そういうわけではなくて、これまで統計的に見て、えっと……」
「ん？」

つらつらとスムーズだった彼女の話が、急に詰まる。
先を促すと、おずおずと彼女は言った。

「えっと、こちらでは、なんとお呼びすればいいのでしょうか？」
「ああ、なんだ。――――オダマキ・カナタ。これがこっちでの名前だから、気軽に『カナタ』って呼んでもらえると嬉しいね。あともっと、くだけた調子でいいよ」
「あ、はい、分かりました、カナタさん」

俺の呼び名が決まったところで彼女は続きを話し始める。

いろいろな説明があって長くなったが、今までの転生者の統計を取ると、体と魂の調和が崩れた者のうち、大体１５～１８歳の間にこの現象を起こす人数が圧倒的なんだとか。
それで、転生者がこのぐらいの年代になる頃に対象人物を観察し、兆候があれば許可を得て記憶を消すらしい。

「で、その観察のために俺の前に？　でも俺、もう１６歳だけど？」

そんなことを言ったら、なぜか睨まれた。
理由を聞いてみると

「一か所に留まってくれなかったから……私が最初に探知した場所に行ってみても、そんな気配もなかったし、確かめれば別の場所。そのあとも探査するたびに場所が違って……ポケモン達にも苦労を

かけちゃったんですから」

なぜポケモンを持ってたのか聞いたら、『その世界のルールは厳守』らしい。

詳しく聞いてみたらすごく長～い答えが返ってきたので、はしょる。

それは良いとして、俺を捕まえられなかったことは、俺が原因だろうな。

確か１５歳なら、その頃はハルカもまだフィールドワークに出てなかったから、俺の仕事も多かった。

長く滞在したとしても１ヶ月いたかどうかって具合だし、簡単な仕事が続けば、ミシロに戻らず旅先から旅先へ、なんてざらだった。

ハルカが旅に出られるようになって負担が減り、ミシロに帰る回数も多くなったので、山を張って俺を探していたんだろう。

で、彼女は運よく俺を捕まえ、俺は運悪く家族にこの様子を見られた、というわけだ。

……先輩から楽な方の仕事だ、とか言われてたらしい。

まぁそりゃ、旅をする脇役なんてそういないだろうしな。

なんか謝るのは違う気がしたけど、とりあえず謝っといた。……うん、大人しくしてりゃ良かったんだけどさ。

で、今後はどうするかというと

「定期的に観察しますけど、カナタさんの場合は一度捕捉しても空ぶる可能性が高いので、私もこの世界で生活します」

それに、その方が俺を捕捉しやすいらしい。

この世界にいる方が俺に会う確率が高くなるし、いざというときはミシロに山を張ってれば、まず必ず俺に会える。

そう考えての決断らしい。

さて、今後どうするかが決まったところで、今の状況の処理に移ることにした。
現在の様子を二人で整理して、辻褄（つじつま）を合わせる。

状況としては
・『天使』は家族に『カナタの彼女』として認識されている。
・俺がふって、納得できない彼女が俺の家まで押しかけてきた、と説明してある。
この二つが重要なことか。

二人で頭をひねりあって、それなりに辻褄の合う話を作ってみた。

・この『天使』とはフィールドワークの最中に出会った。
・彼女は町暮らしだが、俺は根無し草の状態でいつ会えるのかどうかも分からなかったので、俺が別れ話を持ちかけた。
・どうにか説得できたかと思ったら、ここまでついて来てしまった。
・とりあえず家に上げようと思ったら、こうなった。

……俺、最悪じゃね？
まぁ『天使』の方にも変に突っ込まれると危ないし、ボロが出ないようにある程度の設定を作る。

・彼女はカイナシティの人。住民票などの『カモフラージュ』がカイナシティで登録されていたため。
・両親はいない。最近、事故で死んだことにする。これで余計な詮索はされないはず。
・遠い地方から引っ越してきたので、あまりホウエンには詳しくな

い。

この程度なら、ある程度のアドリブも効く。

と、ここで重大なことに気が付いた。『天使』とか『彼女』とかを当てはめてたから全く考えてなかったけどさ。

……名前、決めてない。

ここの世界の住民票は結構進んでる。

この世界に生まれてきた人間は、すべての情報がコンピュータに収められており、顔写真の撮影や指紋承認程度で引っ越しさえ簡単にできる。

さらにそのコンピュータとやらはどこか見知らぬ場所で管理されているらしく、誰もその場所を知らない。

だから、そこに登録されてれば、どんな人間だってこの世界で生きてくことができる。――――――それが『異世界』から来た存在でも。

だが登録されるのは『情報』だけ。名前までは入力されていないので、何と名乗っても構わない。

……進んでたり、どこか抜けてたり、よくわからねぇな。

とにかく、『天使』の名前を決めることにしたが、簡単なことじゃない。

だが、俺は考えるのが苦手だったから、即決した。

「んじゃあ……お前の名前、『ソラ』ってどうだ？」

「え、『ソラ』……ですか？」

何故？　って顔してんな。
簡単なことだ。

髪、きれいな空色してんじゃん。

そんな程度の思いつき。
でも

「え、えと、あの……」

赤い顔でモジモジしてる。
そんな顔されるとこっちまで照れちゃいます。

それにしても、『天使』とは言いえて妙だ。
可愛らしい顔立ちに白くてきれいな肌。つやつやの髪には光の反射で頭頂にできる光の環、その名も通称『エンジェルリング』が輝いている。
これで背中に羽でもあれば、完璧に天使だな。

そんなことを言うと、さらに向こうは真っ赤に。

「そ、それはさておきっ！！」

めずらしく、天使が主導権を取り返して話を本筋に戻した。

「あの……『ソラ』、気に入ったので、使っていいですか？」

使うも何もあなたのために考えてたわけだし。
俺、改名する予定もないし。

「あぅ……すみません」

何故しょげた……。

「あぁ～～～もうっ！！！！」

なんか話が前に進みそうになかったので、俺は『天使』……もとい、『ソラ』の手を取って握手する。

「……これからよろしくな、ソラ」

「……はいっ！」

元気な声が聞けてなにより。

この後は、家族にさっきの『設定』の元でアドリブを発揮しあい、無事に家族（主に母さんとハルカ）の怒りを解くことができた。ちなみにその時、（偽装ではあるが）恋人関係を修復したことを伝えておいたので、ソラが我が家に急激に溶け込むことができた。

そのかわり

「お兄ちゃん、お義姉（ねえ）さんとはどこまで行ったの？」

「おいてめぇ何を前提にしてんだゴルァ！？」

「カナタ、もうソラちゃんと〇〇〇〇（放送禁止用語）したの？」

「あんた母親のくせになんてこと口走ってんだぁ！！？」

そんなやり取りをさせられる羽目になった。

大体ここら辺で、この夢は終わる。
だって、周りが真っ白になってきたからだ。
こうなると、あと少しすれば目が覚めて天井、もしくは青空が見える。
運が悪ければ曇り空だったりするけどな。

だけど、今回はちょっと予想が外れた。

「……」
「……」
「……」
「……なにしてんだ、ハルカ」

目の前に、強い決意の浮かんだ顔で俺を真上から睨みつける我が妹が、俺の体に馬乗りになってたからだ。
……なんぞ、この状況。

五話　カナタ、夢を見る（後書き）

自分で作ったキャラなのに、そのキャラに向かって『死ね、リア充』とかほざいちゃってるイザナギです。

カナタ、優遇されてますねぇ。

そうそう、自分はあまり『主人公』という言葉を使わないようにしています。
なぜかと言えば、自分の残念な脳みそでは、主人公と言えばユウキ君とカナタ君が思い浮かぶからです（ぇ

ちなみに
表の主人公：ユウキ
裏の主人公：カナタ
みたいなイメージです（何

もう眠い……もっと余裕を持って投稿できるようになりたい……。

ではっ！！

六話　ハルカ、旅立つ（前書き）

今回も難産。
大筋が決まってるとはいえ、何も考えずにやるのはキツいッス……
（超今更

六話　ハルカ、旅立つ

「……なにしてんだ」
「……」
「……答えろ、ハルカ」
「……」
「……おい」
「……て」
「は？」

俺の堪忍袋が切れそうになった瞬間、ハルカが言葉を発した。
けど、声が小さくてよく聞き取れない。
なので聞き返してみた。
……ちなみに今の状況は、前の話を参考にしてくれ。

「ワンモアタイム」
「私を強くして！！！」
「おぅっ！」

耳元で叫ぶなや、鼓膜が破れるだろーが。
強くして、強くして、と、途端にまとわりつき始めるハルカをどうにか引っぺがし、とにかく寝床から抜け出す。
ハルカをどうにか宥めて、部屋から追い出した。
内開きだから、ドアの前に本を積み上げて開かないようにもする。

「ねぇ！　お兄ちゃん！！」
「やかましい！　今何時だと思とんのじゃ！！」

時計を確認する。朝の六時だ。母さんとマサトが起きるぞ……。
ったく、今日は珍しく一日フリーなはずだったのに……。
今日は遠くまで出かけるつもりだったけど、この分じゃあ諦めた方が良さそうだ。

「着替えるから待っとけ！！」
「え～、別に兄妹だから良いじゃん」
「お前は良くても俺が嫌なんだ！」

やいのやいのと言葉をいくつか言葉を交わし、ハルカにリビングで待ってるように伝える。
まだ駄々を捏ねていたが、言うことを聞かないと協力しない、と言ったら、ようやく素直に指示に従った。
まぁ、声の感じからして渋々なのは丸分かりだが。
……しかし、実の妹とはいえ、女の子の前で服を着替えるのはダメだろ。
たとえ向こうが許可したって、俺はできない。……俺にだって、プライドぐらいあるんだぜ……。

それにしても、ハルカの『強くして』って、なんだろうか。

……あぁ、なるほどぉ。

ユウキ君が旅立って一日経ったしなぁ。コトキタウンより先とはいえ、徒歩でも十分一日で行けるし、ランニングシューズならその半分程度で到着できるよな。

……なんで分かったかって？
おいおい、俺は『転生者』なんだぜ。
新作はやったことなかったが、それでもホウエン地方は『主人公』として冒険したんだ。そんな世界に俺はきた。この世界の『ストーリー』は全部頭ん中。
ハルカが関わる『イベント』の内容なんて印象的すぎるからな。

……ん？
『じゃあ、部屋にあるD〇のゲームはなんだ』って？

……うん、俺も気づいた瞬間、ツッコんだ。
だけどやってみると意外や意外。
全シリーズが『主人公がポケモンになって世界の危機を救ったり悪の組織を倒したりする話』になってた。
『秘密のダンジョン』みたいな感じだけど、ストーリー的にはそれぞれの『本家』の内容に若干にせられていたな。

で、これが面白いのなんの。全国で（言うなれば日本全土で）第一作が大ヒット、ついには海外まで進出しているらしい。
システム的には、トレーナーの概念や人間の存在を除外しているだけな感じ。
主人公一匹だけが変更不能だが主人公を含めて6匹のパーティを組んだり、通信対戦も可能だったりする。

そう、俺、ハマりました。
マジおもれぇ……。

……あ、めっちゃ脱線した。
軌道修正、軌道修正。

ユウキ君が旅に出たばっかだし、もう終わってるだろーなとは思ったが、こんな事態になるとは……。
……ま、俺に出来る事なんてたかが知れてるが、かわいい妹のためだ。

着替え終わってドアの前の本を除けてリビングへ。
すでにハルカはキッチンから拝借したパンを頬張って、リビングにあるテーブルについている。
俺もパンを拝借。ハルカの対面に座って、モソモソと食べる。

ハルカの様子を見ると、どことなく元気がない。
11年間、兄であるからこそ分かる些細な変化。
俺の言葉で冷静になったのもあるのかね。

まぁ、やはり想像通りのようで。

「（モソモソ）……ユウキ君と、何かあったか？」
「……！！　ぐむっ！　ぐふっ！！」

『ユウキ』というピンポイントなワードが見事に的中したのか、ハルカが咳き込む。
とりあえずミルクの入ったコップを渡すと、ものすごい勢いで飲み干した。
ハルカの呼吸が落ち着いたのを見計らって、本題に入るとする。ちなみにパンは完食したぜ。

「勝負でもしたのか？」

「……センパイとして、新人君に『ポケモンバトル』とはどういうものか教えてあげようかな、って思ったんだけど……」
「見事に返り討ちにあいました、と」
うぐっ、なんて言って、ハルカはうつむく。
「……だって、旅に出るのは初めてだ、って言ってたから」
「ナメて、かかったんだな」
ぐっ、と鳴いてさらにうつむく。
「……ポケモン持つのも初めてだって言ってたんだもん。しかも二匹……」
「けど使ってきたのは、タイプ相性のいいミズゴロウ一匹だけ」
あうっ、とかいってまたうつむく。
俺の言葉に反論がない以上、全部事実だな。
たしかにハルカの言うとおり、『トレーナー歴』はハルカの方が上だ。野生のポケモンに襲われたりすることもあるので、バトルの経験もそれなりにある。
ただ、『対人戦』をあまり経験していない。
この近辺にポケモンを『飼ってる』友達はいるが、戦闘用のを持ってる人はたった一人だし、その一人が俺だからなぁ。
俺もハルカとはあまり相手をしてやれなかったしな。……主にフィールドワークと親父のせいで。
「で、俺にどうしてほしいわけ？」
話を本筋に戻す。

「お兄ちゃんに鍛えてほしいの。だって、お兄ちゃんバッジ7つ持ってるでしょ？」

「バッジを多く持ってるからって、強いとも限らないし人に教えるのがうまいとも限らない。……だいたい、俺は『ひでんわざ』を使うためにバッジを取ってるんだ。強くなるためとか、それこそ人に教えるために取ってるわけじゃない」

この世界のバッジは、ある意味で『免許証』のような役割をはたしている。

『ひでんわざ』の取得者がそれをちゃんと使いこなせるだけの力量があるかどうか確かめるため、それぞれ八つある『ひでんわざ』に対応したジムが置かれ、そのジムに通うか、ジムの主『ジムリーダー』に挑んで勝利を収めれば、対応した『ひでんわざ』の使用が許可され、その証としてバッジが送られる。

ただしジムリーダーも生半可な強さではなく、『ポケモンバトルの鍛錬場』としての側面もあるジムを統(す)べるものとして、彼らも生半可な相手に負けることの無いように鍛練を怠ってはいない。

……言っちゃなんだが、俺はどのジムもジムリーダーを倒してバッジを手に入れた。実力はそこそこあるつもりだ。

トウカジムもそろそろ良いだろうし、行ってみようとも思う。

……でもぶっちゃけた話、バッジは無くても『ひでんわざ』は使える。

車のように自分で操縦するわけではないので、『バッジを持ってるトレーナーから貸してもらった』り、『バッジ所有者と同伴』など様々な規定があるものの、一応バッジ無しでも『ひでんわざ』は使用できる。

『ひでんわざ使用許可証』なるものも発行されている。
こちらは主に『ジムに行く時間がない』人や『バトルの腕は必要ないが『ひでんわざ』が必要な職に就いている』人がとる。後者として、親父もとってる。
システム的にはまさに運転免許証と同じ。
18歳以上、という年齢制限もあるため、俺やハルカはジムに挑戦したり親父からポケモンを借りたりしながら仕事をするわけで。

とにかく、バッジにはそういった色々な意味がある。
バッジは強さのステータス的側面も持ち合わせており、数に応じて、『ポケモンリーグ』のシード権やその他で優遇されることも。

このあたりじゃ、俺の他にバッジ持ちはいないし、俺に頼るのも当たり前か。
だが俺は口下手なところがあって、物をうまく伝えることが苦手だ。
何か伝えられることがあって、誰かに教えなければならない時は（もしあれば、の話だが）行動で示して教えるぐらいしかできない。
間違っても、指導者にはなれん。

「でも、お兄ちゃん」
「それにまず、そもそも」
「……？」

何かを言いかけたハルカを制し、人差し指を立てて、ハルカに言う。
まずはこれ。明らかな欠点。

「お前は経験が少なすぎる」
「……」
「人に教えてもらう前に、自分に足りないことを補うべきだ」

教えてもらっても、身につかないだろ？
そう言うと、ハルカはうつむきながら小さくうなづいた。

……う～ん、言い過ぎたかな？　あとでお菓子あげようか。
で、足りないものは他にもある。

「才能だ」
「……さい……のう？」

そう、『才能』。
とんびが鷹を産む、なんて話は良く聞く。こちら風に言えば『オオスバメがエアームドを産む』、と言ったところか。
だがそんな風に言われるのは、物珍しいからだ。

『鷹が鷹を産む』なら、そこに矛盾は生じない。
なにせユウキ君は『ジムリーダー』の息子なのだから。
まだ赴任する前だとしても、ジムリーダーになるための鍛錬に、おそらくユウキ君もほとんど同行していたはずだ。
強くなろうとする親の背中を見て育ち、体内には『強者』の血が流れる。……ポケモンを持った瞬間、才能が開花しないのがおかしいかもしれん。
おそらく初めての冒険でその才能が開花したんだろう。

たいして、俺たちは学者の家系だ。強くなる必要はない。
それにハルカが持っていたのは、まだ小さいキモリ。レベル的にも互角のはずだ。
戦力が五角なら、勝負を決めるのは指揮者（トレーナー）の実力。
で、ユウキ君の方が実力は上だったからユウキ君が勝った。

言ってしまえば、それだけのことだ。

目に見えて沈む妹に、俺が言える事はこれぐらいしかなかった。

「……旅にでも出てみたらどうだ」

「……え？」

「旅に出て、いろんなことを経験してみろ。『強くなる』とは限らないが、それでも何かを掴めるきっかけにはなると思うぞ」

強くなりたいのなら、ジムに通えばいい。センリさんのジムが近くにある、入門も簡単だ。

だが、それだけのために今この時間を費やすのは、何とも勿体なさすぎる。

旅なら、いろいろな経験をする。

俺だって１０歳ぐらいのときに旅に出た。

怖い目にあったり泣いたりしながら、行く先々でいろんな経験ができた。

一年かそこらで帰ってこれたが、俺の中ではあの旅は一生モノの思い出で、なおかつ今の俺を作り上げた根幹だ。

ハルカはフィールドワークで全国を飛び回ってるとはいえ、それは言わば『他人行儀』なところがあるだろう。終わればそれまで、みたいな。

旅は『自分が中心』だ。いやでも自分が本位になるため、ちゃんと見なかった、見落としたことを再確認、再発見できる。

「強くなりたいなら止めはしない。だが、お前は――――――俺もだが――――まだまだ十分に若い。挫折なんてこれから先いくらでもする。――――――あのユウキ君だってな」

挫折の無い人生は、それはそれは面白くないし、そうそう拝めることだってないだろう。
いくら天才だって、くじけるときはある。
大事なのは、立ち直るスピードだ。

「これから先、強くなろうと思えばできるさ。今は『世界を知ること』が大事だと、俺は思う」

旅に出たのはもう6年も前で、でも鮮明に覚えてる。
ハルカも俺の6年前の話をしっかり聞いてたし、俺の言葉を正面から受け取るだろう。

焦んなくていい。一時の感情で、やりたいことまで見失うな、って意味に。

たぶん、ハルカは将来、もっと大きなことができる。
ゲームじゃわからなかったが今、面と向かえば、それがわかる。

なんたって――――――遠く果てない空が瞳の中に映っているからだ。

「……うん。私、旅に出る」
「……おう」
「旅に出て、フィールドワークじゃ見られなかったところを、全部見てくる」
「そうか」
「それでね――――――」

――――――世界の果ても、見てくる――――――

……なるほど。
運命って、こういうもんかねぇ。

――二人そろって、目指すところは一緒だなんてな。

俺しか知らないその言葉が持つ意味を、俺は苦笑いで流す。
少し寂しい気はするが、相手がユウキ君なら問題ないな。……多少、向こうが鈍感なのが気になるが。
内心の感情をなるべく出さずにちょっと微笑むと、

「世界の果ては遠いぞ。――――――たまには帰ってこいよな」

決意を持った少女の髪を撫でた。

さて、明日からまた大忙しかもしれんな。
明日もフリーだが明後日には、また出かけなきゃならん。
だから今のうちに言っておきたい。

「――――――――――お前の行く末に、幸多からんことを」

俺の旅でも、燦然と輝く、この言葉を。

六話　ハルカ、旅立つ（後書き）

はい、第６話、終わりですー。
キツイ、眠い、足が痛い
もう後書きを書く気力もないｏｒｚ

今回はまじめな話、かな？
カナタのキャラが違うような気がしたけど、まあいいや。
書くのが２時を過ぎると、変なテンションになってどーでもいい新しい設定がポンポン出始めるのは勘弁してほしい……いや、俺のことなんですが……。

マイページにも書いてあるように、更新頻度が遅く、しかも不定期になります（てかすでになってます
それでも見続けてくれている皆さんに、百万の感謝を！！！
そして更新頻度の遅さに百億の謝罪を……。

次回は……章の題名の通り、カナタを旅立たせますか。

ではっ！！

七話　カナタ、挑む（前書き）

予定変更、まだ旅立ちません

七話　カナタ、挑む

おっす、カナタです。
俺は今トウカシティに来てます。

なんでかって言われれば、やっとトウカジムのジムリーダーがやってきたからさ。

そう、ユウキ君のお父さん、センリさんだ。

このトウカジムで解禁される技マシンは『なみのり』。
今まで海上でのフィールドワークもそれなりにこなしてはいたけど、その時に採る方法は『民間の船をチャーター』したりだとか、『親父のポケモンを借りる』だとかだったりしたんだ。
大抵の準備は俺がやんなくちゃいけなかったりするわけで、手続きとか面倒だし、自分一人だけで海を行ければかなり楽になると考えた。
研究用の器材なんて『ずかん』程度で十分だし、一人の方が身軽だから。

ちなみに今はトウカジムの前にいるわけだが、周りにもちらほら人がいる。
背中や足もとにリュックを背負ったり置いてたりするから、この人たちもジムに挑戦しに来たんだろう。
今は早朝だから、この後も多くなっていくはずだ。
なんせ、ホウエン地方のジムの唯一の空席が、やっと埋まったからな。

ここまで、俺と同様にバッジを7つ集めた奴らからすれば、ようやく届いた朗報だ。

バッジを8つ集めれば、予選をかっ飛ばしてポケモンリーグの決勝トーナメントに進出進出できるからだ。

今までトウカのジムリーダー不在のせいで、7つ持っていた奴らも（多少の優遇はあったが）予選から這い上がることになっていた。
それはつまり予選の分だけ数多く戦う、ということであり、その分だけ戦術や手持ちの傾向をライバルにさらすことになる。
そのリスクを減らすために、彼らは8つ目を集めてトーナメントに直接入ろうとしているんだろう。

つまりそれだけ、ここにいる奴らは必死なんだろうか、と予測する。
そうなったら、少々面倒くさいかな。

俺も、仕事のためとはいえバッジを集めている身だ。
バッジを多く持つほど、リーグの『有力な選手』として他の奴らや、揚句の果てには、マスコミにまでマークされる。
今までは予選トーナメントさえ出場せずに大会をスルーしてきて、訳を聞かれれば『研究のため』と言ってきたが、8つも集めたとなれば、決勝進出という『特権』とも言える特典がついている。いくら研究者と言えども、8つのバッジを集めることができるほどの強さを持つ、なんて認識をされるかもしれない。

別にバッジを8つすべてとったからと言って、必ずリーグに参加しなければいけないわけじゃない。
でも手に入れたバッジは『強さの証』なわけで、そんなことをマスコミあたりが取り上げてしまうと、力試し、なんて言って挑んでくる奴も出てくるようになるわけで。

それがまだ何もないときにブラブラしててやってくるならまだ良いけど、最悪なのはフィールドワークの真っ最中に勝負を挑んでくる奴だ。

こちとら真面目に定点観測やったり、気づかれないように静かに生態を調査したりしてるのにどっかの馬鹿が俺を見かけた途端、勝負を大声で吹っかけてきて、調査を台無しにしてくれる。

それも一度や二度じゃなく、何度もこんなことがあったもんで。

最初のうちは一人ひとりに事情を説明して、（憂さ晴らしに）バトルを受けてやったりしてたけど、何度も頻繁に起こるもんだから俺もキレた。

んで、『実際に戦って強さを確かめてみましょう』なんてほざいて、またもや俺の調査を台無しにしたアナウンサーとカメラマンを文字通り秒殺して、ホウエン全域に放送させることを約束させてから、俺は宣言した。

『俺はリーグなんかどうでもいい。それより大事なことがある。今度また俺の調査を台無しにしたら、ただじゃおかない』

もうちょっとオブラートに包んだけど、大体こんな感じで。

もちろん、ポケモンリーグを目指す奴らからは『ふざけるな』とか、『なめてるのか』とかいう脅迫文まがいの抗議文が届いたけど、特に気にしない。

ポケモンをそんな暴力的主張などに使うことは禁止されてるからだ。

その手段に出たら最後、ポケモンリーグへの出場権は、予選でさえも永久凍結される。

また、放送があった一時期は挑んでくるトレーナーが増えた。

大半が面白半分のちょっかい出し、他には『その根性を叩き直してやる！！』とか変な使命感（しかもはた迷惑）を掲げて突っ込んでくる奴とか。
後者の方はまだ熱意がある分、話し合えば分ってくれた（しかし調査は台無しになったりした）から、話し合った後に真剣勝負ができた。

……前者の奴らは、文字通り『潰した』。
もちろん圧殺したら犯罪だし、ポケモンで人間を傷つけるのは、よっぽどのことがない限りこれも犯罪。
じゃあ何を『潰した』かと言えば、その他人の迷惑を考えない、甘っちょろい精神を。
ポケモンバトル？　『面白半分』って時点で大した実力なんて無いんだよ、こいつら。

ほら、『にらみつける』とかあるじゃん。ああいうのをトレーナーに使うのは、結構グレーゾーンなんだよね。
そう言う精神的に堪える技をかけて、鼻っ柱をへし折るわけ。
で、バレたとしても、俺のことを知ってくれてる国家公務員（おまわりさん）なら、状況を察して許してくれるのさ。
まぁ、『さいみんじゅつ』↓『ゆめくい』のコンボはさすがに法律で人相手には禁止されてるけど。

話がだいぶ横道にそれたね。
どうも俺は、話を横道にそらすのが得意なようだ。

さてそんなこんなで、俺も――――――――ぶっちゃけ一発屋に近いが――――――ちょっとした有名人になってる。
今でこそ何事も無いように落ち着いているけど、その代わりに、いつの間にやら『「カナタ」という名前の、知る人ぞ知る手練（てだ）れのト

レーナーがいる』みたいな噂が出来てた。

まぁ、確かに俺はそこそこバトルの腕はあるとは思っているが、ハルカにも言った通り俺たちの家系は学者なのでそれほどバトルは得意じゃない。

『じゃあなぜバッジを7つも集められたのか』みたいな疑問が起こるだろうね。

なぜかと言われれば、『傾向と対策』をやっただけ。

ポケモンジムは、一つ一つにそれぞれ専門とする『タイプ』がある。

たとえばこの先の――――おそらくユウキ君がいるであろう――カナズミシティにあるカナズミジムの専門は『いわ』タイプだ。

なら、手持ちを水や草タイプ中心に構成すればいい。

……まぁ、俺は手持ちを固定するタイプの人間だから、6匹のタイプにはあまり偏りがない。たまに入れ替えたりはするけど。

万能型、と言えば聞こえはいいが、対応した手持ちが倒されれば状況が不利になる可能性も高い、器用貧乏ともいえる編成だったりする。

このトウカジム、ジムリーダーのセンリさんは、『ノーマル』が専門。

ならここは『かくとう』タイプで、と行きたいところだが、センリさんの手持ちには『ヤルキモノ』がいる。

ジムリーダーだって自らの手持ちを敵にさらすようなマネはしないが、センリさんが俺のバッジのことを聞くと、自分の専門であるタイプとすべての手持ちを見せてくれた。

『不利な状況に身を置くことも、自らの成長の糧となる』とのこと。

確かに理屈はあってるように思うけど、ストイックすぎないか？

で、俺もどうすべきか迷ったが、けっきょく自分の手持ちを見せて、『このパーティで行きます』と宣言した。もちろん手持ちには『かくとう』タイプの奴もいる。
しかしセンリさんが見せてくれた、このヤルキモノには、『かくとう』への対抗手段がある。

『つばめがえし』
飛行タイプの技だが、わざマシンでヤルキモノも覚えられたはず。
センリさんも、わざまで教えてくれなかった。当たり前だけど。
だから、本当にヤルキモノが『つばめがえし』を覚えているという確証はない。でも用心するに越したことはない。

ノーマルタイプ相手、ということは『ゴースト』も有効手段の一つに数えたかったが、無理だ。
俺の手持ちのゴーストタイプは、『つばめがえし』が当たった瞬間にひんしになる。
それによく調べてみれば、ヤルキモノは『あく』タイプの技も使えるとのこと。

これが、『ノーマル』タイプの厄介なところ。
ほとんどのノーマルタイプが多種多様な技を覚える。
それによって弱点のカバーが容易になっているので、初心者はともかく、熟練のトレーナーまでノーマルタイプを愛用している者も少なくない。

一番シンプルで、一番奥深い存在。それがこの世界での『ノーマルタイプ』だ。

そのノーマルタイプの専門家（エキスパート）を自他ともに認めるセンリさんなら、弱点のカバーをするのは当然のはず。

挑戦するまでに、半日以上の時間をかけて作戦を練りました。

そして今ここに至る、と。

少し回想をするうちに日は昇り切り、少々蒸し暑くなってくる。

ジムはもう開いているようで、周りにトレーナーの姿はない。

木陰でボーっとしていた俺は、さぞかし滑稽だったろうな。

ジムの中は涼しかった。

冷房をかけているわけではなく、隣接する森の木陰を借りて直射日光を防ぐことでジムの内部が涼しくなっているのだ、と入口からすぐ近くにある石像が語ってくれた。

これはジムの事務所との（ＮＯＴ　ダジャレ）インターホン代わりに使われている。

……初めて見たときはビビったけど、その石像自体がホウエンの訛りで接してきたので案外すぐに慣れた。

で、挑戦者たちの様子はどうか、というと

「……ぅぇっ……」

「……なんで……」

「……」

この状況を見てくれ、どう思う。

「すごく……死屍累々です……」

前世で耳にした程度のネタをポロッと口から出すと、なんと石像が答えてくれた。
……なに、この世界にもそういうの、あるんか？
それはそれ、これはこれとして、状況はあまりにも酷い。

グッタリとうなだれる挑戦者たちのその先に、センリさんが仁王立ち。
足元にはポケモンがいた。
あれは見たことがある。『パッチール』だ。
このホウエンの北に位置する、『えんとつやま』からの火山灰が降りしきる町『ハジツゲタウン』の近くに生息しているポケモン。
常にフラフラして危なっかしい姿だとは思うが、その風貌に反してなかなか手強い。
『フラフラダンス』や『ピヨピヨパンチ』といった『こんらん』を誘う技を持つし、レベルアップで『サイケこうせん』やその他強力な技を覚えられる。

おそらく死屍累々としているのは、『かくとう』で挑もうとして見事に返り討ちにあったからだろう。
メインを『かくとう』にしなくて良かった。

っと、センリさんが俺に気付いた。気合を入れていたのか、眼光が鋭い。
怖いねぇ。さすが、ジムリーダーになったお方だ。俺なんかよりも威厳にあふれてる。

今まで出会ったジムリーダーも、いくら若かろうと能天気であろうと、瞳の奥には威厳というかジムリーダーとしての『誇り』がいつも灯っていた。

そして目の前の一人の男の瞳にも。

……うん。

――――――悪くない。

センリさんに射竦(いすく)められながらも、俺の心がそう呟く。

巨大な壁に立ち向かうような絶望。それでも心はざわめき、体が心から震えてくる。

これを何と言ったか……そうだ、武者震いだ。

一目で強敵とわかる相手に感じた感覚。

――――――やってやるさ。

そう心で宣言しながら、声を落ち着かせる。

センリさんも眼光の強さを緩めてくれた。

それと同時にパッチールをボールに戻し、休ませている。

「やぁ、カナタ君。いつ来るかと楽しみにしていたよ」

「買いかぶらないでくださいよ。『バッジ』を貰えれば、それで良いんですから」

そう言いながら肩をすくめれば、センリさんは爽やかに――――――はっはっは、と大笑いしながら

「そう、『バッジを貰うためだけに』ジムリーダーを倒すだけの腕前を身に付けたんだろう？」
「……むぅ……」
その方が手っ取り早かった、なんて言えば次はどう返してくるのやら。
バッジを貰いたいだけならジムで修業をすれば良いだけだ。『ひでんわざ』の解禁程度なら、１週間かそこらで修められる。
痛いところを突かれてしまったな、なんて考える。
「君は君自身を過小評価しすぎているよ。７人ものジムリーダーを１０歳の少年がたった一年で倒せるなんて、ホウエンどころか全国でも珍しいことだからね」
そんなことないですよ。
ほら、カントー地方のチャンピオンはまだ１１歳の少年だったって聞きましたし。
「彼らもまた、君と同じように強かったからだ。そう、君は強い。君の手持ちを見れば、よくわかる。
君によく懐き、全幅の信頼を置いている。『クロバット』がいるのが、何よりの証拠だ」
クロバットは、ゴルバットの進化形だ。
その条件が『トレーナーによく懐いている』こと。
ムロタウンの『いしのどうくつ』でズバットの頃に怪我してたのを介抱したら、ついて来たので手持ちに。
旅の中盤にはすでにゴルバットに進化していて、『そらをとぶ』が使えるようになったころに、ちょうどクロバットになった。

それ以来だし、付き合いも長い。
メンバーも多少変わるけど、その中で『もう一匹』とともにレギュラーの座を守っていた古株。
今は移動用としてクロバットしか残ってないけど。

そう、今日は俺のベストメンバーじゃない。『研究者』として持つには、強力になり過ぎてしまったから。
だから最近はパーティを再編して、新しい主力を作ってる。センリさんに見せたのも、このパーティだ。
そのパーティで俺は今日、センリさんに挑む。

多分ひけは、とらないはず。
そして、そう易々と負ける気も、無い。

「私の一匹目は、パッチールだ。……さぁ……」

センリさんの気配が変わった。
戦いに向かう戦士の気配に。
そしてゆっくり、俺を睨みつける。

「はじめようか、カナタ君?」

俺は黙って腰に手を伸ばす。
一匹目はすでに決めてある。六つあるボールのうちの一つを手に取った。

一つ、大きく深呼吸。

軽く閉じた瞼を開いて、センリさんの眼光に負けないように睨み返す。

「……はじめましょう」

俺の宣言とともに、俺たち二人はボールを宙に投げた。

七話　カナタ、挑む（後書き）

章のタイトル通りにカナタを旅させようかと思ったら、謎の怪電波を受信。
『トウカジムでバトれ』とのことでした。
そしたら長くなって二つに分けることに……

誰かーーー！！　おらに文章をまとめる力を分けてくれーーーーー！！！
次で旅立たせますので、どーにかご辛抱を……。

見てくれてる人に、百万の感謝と億万の謝罪を。

ではっ！！

八話　カナタ、飛ぶ（前書き）

バトルの描写に初挑戦。
正直、微妙です……

八話　カナタ、飛ぶ

「ちょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっっっと待ったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「！！」

「ぅおっと！！」

突然の怒声に俺もセンリさんも動きが止まる。
ボールは放り投げられたまま開かずに床に落ちてしまった。

怒声のした方向を見ると、案内役の石像がこっちに向かってくる。
どうやら、ジムの人が俺たちの様子を見て止めたらしい。

「いったいどうした」
「びっくりするじゃないですか」

「どーしたもこーしたもなかでしょうが！！

どこでバトルば始めようとしよっとや！　ここは『フィールド』じゃなかとぞ！！」

……あ、そーだった。

ポケモンという生き物は小柄な個体であっても、途轍もないエネルギーを体に秘めている。それこそ、一軒家を吹っ飛ばせるくらいに。そしてポケモンバトルとは、その途轍もないエネルギーをぶつけ合う競技だ。

道端や空き地などの『破壊されて困るものがない』スペースが無ければバトルはできず、もしもバトルで損害が出た時は、最悪の場合、逮捕もされる。

なのでジムは、トレーナー達に壊されて困るものがない空間『バトルフィールド』を提供する側面もあり、ジムリーダーに用事がなくとも申請すれば誰でも使用できる。

基本的にジムは公共の場所とされているからだ。

――――――――――そして俺とセンリさんは興奮しすぎて、『フィールド』の存在を完全に忘れていた。

……いや、挑戦者の俺がフィールドのことがすっぽ抜けるのはまだ良いとして……。

センリさん、あなたが忘れるのはダメでしょ……。

「む、つい興奮しすぎてな。君も頭から飛んでいたんだろう？」

「俺は挑戦者だからいいんです」

ジムリーダーたるもの、常に冷静でいてくださいよ、なんてちょっと口悪く言ってみたら

「私も感情を持った人間だ。多少の間違いくらい起こす」

なんて開き直られました。

……大人げなくないスか？

ジムの少し奥にある『フィールド』。

大体……バスケットボールのコートぐらいあるかな。中央にはモンスターボールを模したセンターライン。

長方形の短い辺にトレーナーが立つ場所が設けられていて、そこからポケモンに指示を出す形になる。

ポケモンから指示を出す場所は『トレーナーズ・スクエア』というのが正式な名称らしいが、その目の前には水ポケモンを出した場合や『ダイビング』、『なみのり』などを使う場合のために水槽が備えられている。

このフィールド内に設置してあるものなら、いくら破壊しても構わないことになっているので、『あなをほる』で穴ぼこにしても問題ないとのこと。

で、現在。
俺とセンリさんはそれぞれフィールドの両端に立ち、石像を通して事務の人からルールの説明を受けていた。

「ルールは3対3の入れ替えあり。道具は使用禁止ですが、ポケモンが所持、使用する事は認めます」

センリさんが俺に見せたポケモンは全部で4体。対する俺は6体フルメンバーだ。
このままじゃ俺の方が数的有利なので、対戦ルールは3対3に。
で、道具はトレーナーが使うのは禁止だけどポケモンに持たせて使わせたりはできる。

要約すれば、そういうこと。

3対3は良く使われる対戦方式で『3(スリー) on(オン) 3(スリー)』と呼ばれ、少数精鋭を基本として4~5匹ほどしか手持ちを持たないジムリーダー戦でよく採用されてる。
他にも『タイマン』などと呼ばれる『1(ワン) on(オン) 1(ワン)』、六体フルメンバーでやる『フルマッチ』など、様々な対戦方式があるし、最近では三匹同時に戦闘に出す『トリプルバトル』なるものもあるらしい。

とにもかくにも、センリさんも俺も、手持ちから3匹選抜しなければならなくなった。
……まぁ、センリさんが選ぶポケモンの見当はついてるけど。

「準備は良いですか？」
「ああ」「はい」

石像から声がかけられる。この石像はバトルの審判役もやるんだ。
ちなみにどうやってジャッジするかというと、『フィールド』に何台も備えられたカメラで多角的に観察し、ポケモンの状態などを確認、試合の続行・終了・中断を判断するとのこと。

……実際にジャッジの人がフィールドで審判した方が早いと思うのは、俺だけなのかな……。
このシステムは全国的に採用されてるらしいから、俺のような疑問を抱く人は少なかったらしいな……。

さて、おしゃべりもここまで。
俺は今から『ジムリーダー』に挑戦するんだ。

目の前にいるのは、知り合いの男の子の父親ではなく、『トウカジムリーダー・センリ』

そして『ジムリーダー・センリ』の目の前にいるのは、彼の息子の先輩ではなく『挑戦者・カナタ』だ。
身内としてではなく、ただ純粋に『ポケモントレーナー』として、俺たちは『フィールド』に立っている。

腰のホルダーからボールを外して構えた。
一匹目はすでにセンリさんが宣言してるけど、俺も変更はしていない。

「ではこれより、『ジムリーダー・センリ』対『挑戦者・カナタ』の勝負を行います

――――――――――――――――――――――――――――――始め！！！！」

石像からの声で、俺とセンリさんは同時にボールを放り投げた。
ボールが地面につくと同時にボールが開き、両方とも小柄な影が躍り出る。

その片方に、俺は即座に指示を出した。

「『セッカ』、『かげぶんしん』！！」

飛び出した俺のポケモン、『テッカニン』は俺の言葉に即座に従って、目の錯覚を利用した分身『かげぶんしん』を大量生産する。
おびただしいほどのテッカニンの分身が出来上がり、フラフラするパッチールを囲んだ。
これで、相手の攻撃はなかなか当たりにくくなったはず。

「……なるほど、厄介（やっかい）だな」

とか言う割に涼しい顔が怖いんですけど……。
それに、まだ一回だけだから、十分じゃ無い。

「セッカ、もう一度『かげぶんしん』！」
「むっ！　パッチール、『フラフラダンス』だ！」

パッチールがさらにフラフラしだす。
あれは一種の催眠効果があり、じっと眺めてると目が回ってきて、最終的には混乱状態に陥れるという、なかなかにえげつない技だ。
けど、どうにか『セッカ』には当たらなかったっぽい。ラッキーだったな……。

さらに数の増えた『かげぶんしん』がパッチールの周りを囲む。

ここからのパターンとしては、『バトンタッチ』を覚えていれば、この状態から『こうそくいどう』↓『つるぎのまい』をある程度繰り返してから『バトンタッチ』で他のポケモンに今の状態を引き継

ぐのが理想的だが、あいにく『セッカ』は『バトンタッチ』を覚えるようなレベルにまで達していない。
『こうそくいどう』は特性『かそく』があるので問題ないけど。

テッカニンはほとんどの種族に対して先制できるほどの素早さを持ちながら、あまり強力な攻撃を持たないし、ＨＰもそんなに高くない。
だから、テッカニンは種族的な特性から『自軍の有利な状況を演出して、後続に文字通り『バトンタッチ』すること』を主な任務とされる。

まぁそんなこと、今現在はどうでもいいわけで。

『つるぎのまい』をやったらパッチールの『アンコール』がヒットしたけど、結果的にはプラスだった。
『サイケこうせん』も繰り出してきたけど、こっちは分身の方にヒットして事なきを得て、俺の反撃の時間だ。

「セッカ、『きりさく』！！」

それほど高威力じゃないけど、高確率で相手の急所に命中する技。
さらに先ほど『つるぎのまい』を重ね掛けしてたから、急所じゃなくてもだいぶ痛いかも。

攻撃する際も分身たちも本体と同じ動きを繰り出し、しかし技が当たった一瞬だけ本体が姿を現した。

……これで、もう『セッカ』は交代だな。

と、パッチールが倒れる。どうやら急所にも命中したようだ。オーバーキル気味だった気がする……。

「パッチール、戦闘不能！」

審判の声が響き、センリさんがパッチールをボールに戻した。

「……ふむ、なるほど。『かげぶんしん』、か」

呟いて、俺の方を見る。……どうやら、気づかれたっぽい。

この世界の面白いところは、『ゲームの通りにはいかない』ことだ。さすがにアニメのポケモンのように『気合』やら『根性』やらでどうにかなるわけではないけど、バトルはリアルタイムで進んでいる。こちらが即座に指示を出さなければ、相手が鈍足だろうと先手を取られることもあったりするし、『かげぶんしん』を『こころのめ』とか使わずに攻略する方法もあるわけ。

センリさんほどの実力者なら状況にすぐ適応して、対策を講じてくるはず。

セッカはＨＰも少ない。

どちらかのポケモンが倒れた時に認められるポケモンの交代で、俺はセッカを戻すことにした。

「ほう、まだ十分戦えるはずのテッカニンを下げるとは……それだけ余裕なのかい？」

「んなわけないじゃないですか。さっそく『かげぶんしんのカラクリ』に気付かれたようなので、下げただけですよ」

センリさんの挑発に、俺はとりあえず当たり障りなく答える。

「ふっ、圧勝しても油断も隙も見せない。やはり君を倒すのは骨が入りそうだな。――――――――――――――ゆけ、ヤルキモノ！」

「買いかぶり過ぎです。センリさんだからこそ、こうやって慎重になってるんですから。――――――――――――――いけっ、『クチハ』！！」

センリさんのボールからヤルキモノが飛び出し、センリさんの足元でシャドーボクシングみたいなことをやり始めた。

対して俺が繰り出したポケモンは、クチート。『クチハ』と名付けている。

愛くるしい外見だが、綺麗なバラにはとげがある。

頭についてる口のようなものは本体の意思で噛みつくこともできるからな。

そして、俺が選んだ最大の理由は

「ヤルキモノ、『きりさく』！」

ヤルキモノの鋭い『きりさく』攻撃。しかし

ギィィィン……

胴を狙った攻撃は、しかし『胴』に弾き返される。

「こいつのタイプ、『はがね』ですよ」

外見に反して、タイプの中で最も高い防御力を持つものが多い、はがねタイプだからだ。
そして、このクチハは

「いけっ！　『かわらわり』！！」

かくとうタイプの技も覚えたりできる。

自分の攻撃が聞いていないことに呆然としていたヤルキモノの脳天に、鋼のツノが変形してできた大顎による、クチハの容赦ない一撃が振り下ろされた。

一撃でヤルキモノは目を回し、やがて倒れ伏す。
これで、残り一匹。

「……なるほど」

特に焦るでもなく、センリさんは最後の一匹を呼び出そうとする。
俺のクチハは続投。おそらく出してくるであろう最後の一匹に対して、やっておかなきゃならないことがあるんだ。

「……それは、余裕かい？」
「いいえ、『保険』です」

俺の答えを聞いて、センリさんは最後の一匹を繰り出す。

「ゆけ、『ケッキング』」

センリさんの手持ちの中で最強であろう一匹。
特性『なまけ』は、この世界では動作が緩慢であるだけだ。だから、こちらが先手を打つことも可能。

だから

「ケッキング、『あくび』！」
「っ！！」

いきなりその場でデッカイ『あくび』をされたのはビビった。

動かなくても、最初の行動を打ち合わせておけば出た瞬間に先手を取るのは容易だ。
出鼻を挫かれたけど、まだやれることはある！

『あくび』は相手を『ねむり』状態にする技だが、発動までに時間がかかる。
その間に、これだけはやっておきたい！

「クチハ、『どくどくのキバ』！」

クチハが鋼の大顎を使ってケッキングの腕に噛みつく。パッと見はただの『かみつく』かもしれないが、見えないところで猛毒が流し込まれているはずだ。
三割の確率だから微妙なんだけど。

……最初に技を確認したときはビビったぜ。
なんたって、野生だったからな。野生じゃ覚えるはずのない『どくどくのキバ』を覚えてるとか、まさにゲームじゃありえない現象だろう。
ハブネークのオスと、クチートのメスが親だろうか。
とにもかくにも珍しい個体だったけど、研究とかはせずに育てることにした。ちょうど捕まえたのが、新しいパーティを考えてた時だったし。

そのクチハは『あくび』の効果で眠り始めた。
すぐさま俺はクチハを下げて、残り一匹を取り出す。
相手が『猛毒』状態になっていない場合も考えて、こいつにする。
持久戦ならこいつの方に分があるはずだ。
俺は目前の水槽に向けて、ボールを放り投げた。

「頼むぞ、『トキハ』！」

「ほぉ……」

思わず、といった感じでセンリさんが声を出す。

出てきたのは、太古の昔に絶滅したとも言われていたポケモン『ジーランス』。
1億年前のものと断定されたジーランスの化石とまったく姿が変わっていない、まさに『生きた化石』とも言えるポケモンだ。

「しかし、つい5年前発見されたばかりで個体数も少ないと聞く。どこで手に入れたんだい？」
「あれ、知りませんでしたか？」

かなり珍しいのか、センリさんがそんなことを訊ねてきた。
センリさんはジョウトの人だから知らなかったのかな。

「このポケモン、発見したの俺ですよ」

ルネシティに向かうときのダイビング中に偶然にも遭遇、すぐ捕獲した。
そのあとは仲間の場所を教えてもらい、いつも通り観察して図鑑に情報を記録。
それを親父に見せたら、椅子から転げ落ちるほどびっくり仰天してたなぁ。

いや～、あの時は大騒動になったな。まぁ論文とかは俺もまだ11歳だったし全部親父がやったから、俺の名前はほとんど表に出てないけど。
けど、この功績で親父の名前は全国的に有名になったし、カントーのオーキド博士、ジョウトのウツギ博士、シンオウのナナカマド博士とともに『ポケモン界の権威』とまで呼ばれるようになった。

この『トキハ』自体は5年前からいる古参だが、長らくベストメンバーの候補からは外れていた。すでに水タイプ枠は埋まっていたし、ダイビング要員として少しの間手持ちに入れていた程度。
しかし今回の『ベストメンバーの一新』という計画の際に、俺が真っ先に白羽の矢を立てるほど実力は持っている。

「トキハ、『ダイビング』！！」
「……『あくび』対策として『ダイビング』か」

予想通り、まず『あくび』を繰り出そうとしていたので指示が飛ばされる前に潜る。
もちろん『あくび』はその技を見ていないと発動しないので、『ダイビング』で回避した形だ。

そしてトキハが水槽から躍り出て、ケッキングに頭突きを食らわせる。技じゃなくて、『ダイビング』はこうやって潜った勢いを頭突きや体当たりのような打撃技に変えて攻撃するんだ。

ボケッと突っ立ってたケッキングの脳天に命中したが、あまりダメージを食らったように見えない。
無駄にＨＰも防御力も高いからな、タイプ一致の攻撃だったけど、深刻なダメージとまではならなかったようだ。

ただ、ちょっと顔色が悪い気がする。
もしや……

「ちっ、『もうどく』か……」

センリさんの呟きが、なぜか耳に届いた。
もしセンリさんの言葉が本当なら、俺にとても有利な状況になる。
これを逃す手はない！！

「トキハ、たたみ掛けるぞ！　『とっしん』！！」

本来なら自分もダメージを受ける代わりに大ダメージを与える技だが、トキハの特性は『いしあたま』。反動によるダメージを一切受ける心配がないから、思う存分に技を繰り出せる。

と、センリさんの口元が微笑んでいるのが見えた。

……あ、やべ、今思い出した。
センリさんの手持ちって、全員……

「ケッキング、『からげんき』だ！！」

そんな技、覚えてましたよね……。

カウンターのようにケッキングのぶっとい右腕が、トキハの『とっしん』と真っ向からぶつかり、トキハを吹っ飛ばした。
いくら『いしあたま』で岩タイプとはいえ、結構ダメージを食らった模様。やっぱり、頭部はどの生物も弱いのか。

けど、これで次の動作までの隙ができた。
トキハに声をかける。元気な声を返してくれたから、まだいけるだ

ろう。

『からげんき』とは、それ自身の攻撃力は高くないが、自身がまひ・どく・やけどなどの異常状態になると威力が二倍に跳ね上がる恐ろしい技だ。

単純な計算でいえば、異常状態で『からげんき』を繰り出せば、その威力は『すてみタックル』を抜き、『はかいこうせん』にも迫る威力になる。

今回はこっちに有利な相性だったから、どうにか最小限で食い止められたが、このままだと流石にキツイ。

……これで行くか……。

『なまけ』を持つケッキングに対して、確実に攻撃を食らわずに体力を削る方法は、今のところ、これしかない。

「ケッキング、『からげんき』！」

「トキハ、『ダイビング』！」

トキハの動きがケッキングよりも速かったようで、ケッキングの攻撃が当たる前に水中に潜りこめた。

ケッキングの攻撃はただ単に水面に水柱を立てるだけ。

……その水柱のせいで、俺ビッショビショなんですけど……。

まぁ、今は置いとこう。

ケッキングは相手を探して水面を凝視してる。けど、水中は暗くて俺でもよく見えない。

「いけ、トキハっ！」

凝視していたケッキングの眉間に、本日二度目の頭突きが決まる。
大きくケッキングがよろめいた隙に、トキハに『ダイビング』をさせた。

これが俺のケッキング対策。
『ダイビング』が無かったら『そらをとぶ』でも代用できるかもしれない。
これらの技は攻撃までの時間差があるので、ケッキングのような攻撃ペースの遅いポケモンのタイミングを外すことで、確実に体力を削りながら、こちらがダメージを受けることはない。

何度か繰り返したら、さすがにケッキングもフラフラし始めた。……『フラフラダンス』を覚えていないことを切に願う。
『もうどく』状態だし、ここらで一気に決めよう。

この技を取得するレベルまで育てるのが面倒くさくて、さっさと教えさせた技だ。
『いしあたま』だからこそ遠慮なく使える技。

「決めろ、トキハ！　『すてみタックル』！！」

ルネシティジムリーダー・アダンにアタックしたいという女性から教えてもらったんだが……ポケモンに教えられるほど極めたら、逆に命の危険がありそうな気が……いや、もう気にしないでおこう

……。

『すてみタックル』で水面から一気に飛び出し、トキハはケッキングのもとへ一直線に飛ぶ。
それを見たセンリさんもこの一発で決着をつける気なのだろう。真正面から迎え撃つ体勢になった。

「最後だ、ケッキング！　振り絞れ！　『からげんき』！！」

もう一度、トキハとケッキングの右腕が真っ向からぶつかる。
空中での支えがなく威力的にも相手に劣るトキハの攻撃だが、ケッキングも『もうどく』の影響で体のキレもなく威力も下がってるように見えた。

つまり、互角。

あとは……運任せ。先に吹っ飛ばされた方が負けだ。

――――――――――ズドンッ！！！！　と音がした。

ケッキングの腕がはじかれ、みぞおちにトキハの『すてみタックル』が決まった音だ。

平均全長２．０ｍ　平均重量１３０．５？　の巨体が宙を浮き、センリさんの手前の水槽に叩き込まれた。
２．５メートルはあろうかという大きな水柱が立ち、飛沫をセンリさんに食らわせる。

「ケッキング、戦闘不能！！　これにより、ジムリーダー・センリの手持ちポケモンがすべて戦闘不能になりました！

――――――――よって、勝者　挑戦者・カナタ！！」

……ふぅ……けっこうヤバかった。
これでも結構綱渡りの連続だったし。

セッカの『かげぶんしん』が破られる可能性もあったし、クチハの場合はかくとうタイプの技を覚えられてたらアウトだった。トキハの場合も同様。

まぁ、終わったことをいつまでも言うのはあれだろう。

「流石だ、カナタ君。私の完敗だよ」

センリさんが声をかけてきた。
上から下まで水浸しだよ。大丈夫かな……まぁ俺も似たような状態だが……。

「最後は相打ちのようなものです。『からげんき』であそこまでやられるとは思いませんでしたから」
「それでも、最後は力で私のケッキングをねじ伏せた。それにジーランスに換える直前に、クチートに『どくどくのキバ』をさせただろう？　『からげんき』の強化になってしまったが、やはり『もうどく』の状態ではきびしかった」
「成功率はたったの三割です。『当たればいいな』的なものですから、運が良かっただけですよ」

なんで、しきりに俺を褒めてくるかなぁ……本当に俺もギリギリだったのに。
そう言ってみると、センリさんは微笑んだ。

「運も実力のうち、というじゃないか。『強者（つわもの）』とは、自らの運さえ自分で引き寄せるものだ。

君は強い。間違いなく。

現に、君はホウエンで最初にバッジ８つを手に入れた。それは今現在、君がこのホウエンのトレーナーの中で『最強』であることを示している」

さすがにそれは買いかぶり過ぎです（汗

「そうか？　私はそうは思わないがな。

さぁ、これが君が『最強』である証、『バランスバッジ』だ」

おお、これでやっと『なみのり』が使える。

ひでんマシン自体は持ってるから、これですぐにでも海に乗り出せるな。

「それと、これを」

センリさんが、小型の腕輪程度の大きさの装置を差し出す。

「これは……『からげんき』？」

「そうだ。さすがによく分かってるな」

ジムリーダーには、すべての手持ちが覚えている技が一つあり、その技マシンの所持が認められている。

で、俺みたいにジムリーダーを打ち倒したやつに、自分を倒した証として技マシンを授ける仕来(しきた)りがあるんだ。

つまり、センリさんは『からげんき』を手持ち全員に覚えさせてたことになる。恐ろしや……。

次にセンリさんと戦うときは、異常状態の使い方だけは気を付けよう、と俺は心に決めた。

ジムを出ると、日はそんなに傾いてなかった。まぁ、一時間やそこらの戦いだったしな。

「……それにしても、気になる話を聞いたな」

『話』とは、ジムを出る直前に交わしたセンリさんとの会話だ。

簡単に言えば、『最近、怪しい格好の者たちが事件を起こしたが、なかなか捕まらない』とのこと。

特徴は状況によって違うそうで、ある時は赤や黒をベースにした格好をしていたり、またあるときは白や青を基調にした格好だったりと、まちまちだそうだ。

……まぁ、思い当たる節はあるんですけどねぇ。でも俺の『本当の』身の上を話したところで信用される訳ないので、黙ってたけど。

ところでなぜセンリさんがそんな情報を持っていたかといえば、地域の治安維持もジムリーダーの仕事に含まれるからだ。

もちろん、警察に類する組織もあるが、ポケモンが事件に絡むとジムリーダーは、ほぼ全員参加する。ジムリーダーの情報網はかなり

広大であり、知識の面からも組織のサポートを任されることも多い。
ジムの壁に張り紙をすれば、それだけでかなりの人目につく。
『ジム』は町の誇りであると同時に、ある種平和の象徴なんだ。

それにしても、まさに『秘密結社』だな。正体をさらさず世間に気付かれることもなく、着々と行動を起こしてる感じがする……。
きっと確認されてる行動は、下っ端たちがボロを出したからだろう。
水面下じゃ、もっと大きなことが動いているはずだ。

……もっとも、俺はもうその『目的』の内容も結果も分かり切ってるんだけど。
けど、やっぱり不安だ。

「……みんな、出てこい」

腰の六つのボールを放り投げて、中にいた俺の手持ちをすべて出す。
その面々を見て、さらに不安が募った。

今回、俺が育てているのは、いわば『トレーナー戦』に特化したパーティだ。
公平公正なルールの下で相手を上回ることができるように育てている。

……けど、その『ルール』を『敵』が守るとは思えない。
悔しいが、今のチームじゃおそらく実力不足だ。

……セッカみたいに『トレーナー戦』に特化してしまったポケモンだけ下げて、その穴を主力で埋めるか。
まだ『敵』が本格的に動くまで時間はあるだろうし、『主力』に追いつけなくてもレベルの底上げはできるはずだ。
トレーナー戦に特化した奴を育てるのは、そのあとでも十分間に合う。

ま、こんな風に育成計画を練っては見たけど、俺はせいぜい裏方止まりだろうな。

『主人公』はもう旅に出た。『悪の組織』を倒すのは、『主人公』の役目さ。

「さて、『ヨカゼ』。サイユウシティに行こうか」

俺のクロバット『ヨカゼ』は俺の両肩を掴んで、浮かび上がる。かなりの距離があるが、クロバットは翼を休ませながら一日中飛ぶことができるので、すぐに着くはずだ。

何が起こってるのか、まずは確認しないと。

風を切り裂いて、俺はホウエンの東の果てへと飛んだ。

八話　カナタ、飛ぶ（後書き）

ほぼ1か月ぶりの更新です。
長い間更新してなかったのに、週間アクセスがまだ１０００近くあってそれだけ待たせてたことに恐縮してます……

そしてお気に入りが８０件を突破！（滝汗
ますます自分の更新が責任重大になってきました……どうしよう……（汗

カナタはニックネームに拘る人です。漢字をポケモンの雰囲気やタイプに当てはめる感じで付けたり、連想ゲームでつけたりします。

テッカニン：素早い↓電光石火↓石化↓『セッカ』
クチート：クチート↓そういや前世で読んだ漫画に『朽葉（くちは）』っていたな↓じゃあ『クチハ』で
ジーランス：生きた化石じゃん↓『時』の『波』で『トキハ』ってどう？↓いいねｄ（・ω・）

ちなみに真剣に名づけてますよ……（汗
クチハの元ネタは、わかる人にはわかります。

ニックネームは、ハルカはつけませんがユウキはつけます。

そしてカナタがサイユウシティに向かった理由は、次回明らかにします。

長らくお待たせしてすみませんでした（滝汗
辛抱強く待ってくださった方々に、百万の感謝と億万の謝罪を。

次回もこんな感じで遅くなるかと思います（汗
でも完結させるつもりでもあります。
今後とも、よろしくお願いします。

ではっ！！

九話　物語は、動き出す

『風を切り裂き、東へ飛ぶ』

……字にすればかなりカッコいいけど、現実はそんなに甘くねぇ……。

「あばばばば……っ！！」

今の俺がどんな状況か説明しようか？

『水平方向にスカイダイビングをしている』ってとこかね……。

『そらをとぶ』で飛んでいるときの風圧を、もろに受けて飛んでるわけですよ。

空気が口の中まで入ってきて頬の肉が、ぶるぶるべちべち音を立てるからウルサイのなんの……。

砂漠に入るときに使うアイテム『ゴーゴーゴーグル』が、こんなところで役に立つとはね。でなきゃ目も開けられないぜ。

……待てよ、ゲームで『ゴーゴーゴーグル』を貰うのは『なみのり』をする前、ハジツゲタウンに行く際だから『そらをとぶ』も使えな

い。つまり、『ゴーゴーゴーグル』は『そらをとぶ』を使う際に目を保護するためにもあるって考えられるな……。

『ゴーゴーゴーグル』って砂漠専用じゃなかったんだ。そういや、『ダイビング』の際もこのゴーグル使ったんだっけ。忘れてた。

意外と便利だったんだな、これ。

サイユウシティには、ホウエン地方のジムリーダーを統括する『ポケモン協会ホウエン支部』が存在する。『ポケモンリーグ』を運営する『四天王』と呼ばれるグループもポケモン協会の傘下だ。

俺は何をしに来たかといえば、ポケモン協会に掛け合って『謎の犯罪者集団』の情報を聞き出すため。

いくらこの地方のジムリーダー、ひいてはホウエン全域のトレーナー達を統括する協会だって、たかが一塊のトレーナーにホイホイと情報を渡すわけじゃない。

俺が『オダマキ博士の息子である』こと、『この地方のポケモンの研究に多大な貢献をしている』こと。

そして、『俺が『強い』トレーナーである』から、このような待遇を受けられる。……どーにも納得はいかんが。

風圧との戦いをかれこれ2時間。途中でカイナ、ルネ、トクサネに立ち寄って休憩しながら結構なハイペースで飛び続けると、それほど大きくはない、台地を主とした島が見えてきた。

周りは断崖絶壁になっており、島の中腹に流れる滝が島の『正面玄関』といってもいい。

『正面玄関』の先にはポケモンセンターサイユウ支部と、ぽっかり空いた洞窟『チャンピオンロード』。

『ロードなのに道じゃない』とかいったツッコみは無しだぞ。ここを通るトレーナーの中からチャンピオンが生まれるって都市伝説もあるし、レベルの高い野生ポケモンもいるから修行場にもぴったり。クチバもここで捕まえた。

『ポケモンリーグ』開催の際には『フルイ』の役目も果たしたりする。

『チャンピオンロード』を抜けた先に待つのは、ポケモンリーグの舞台にしてホウエン地方トレーナー達の『聖地』とも言われる、『スタジアム』。

ありていに言ってしまえばサッカースタジアムのような形をしている。アニメのポケモンのスタジアムとほぼ同じ構造だ。

色々な『カラクリ』が仕組まれているらしく、噂によればカラクリ大好きの『カラクリ大王』も設計に参加したとか……。

まぁそこはどうでもいいとして、俺の目的の場所はスタジアムの先。

天を突くような超高層ビル！　……の最上階にあるポケモン協会ホウエン支部だ。

高層ビルは、べつに中に四天王とチャンピオンが個室で待ってるわけではなく、ポケモン協会の階層以外はすべて協会が運営している『ホテル』だ。

リーグ開催時は出場者の宿舎にもなるらしく、内部にはポケモンセンターと同等の設備が整えられてるし、売店（というよりもはやショップ）にもさまざまなポケモン関係の商品が取り揃えられてる。

他にも特筆すべきことは多々あるが、後のために取っておこう。

「……ふ～」

長旅の疲れにぐったりしながら、俺は協会の正面玄関に降り立った。

ヨカゼをボールに戻して、もう一度、支部のある最上階を見上げてみる。

……たっけぇな……そういやポケモン支部って、有事の際には本部が飛行船になってホウエン全域に指示を出すなんて都市伝説まである……。

まぁ今はまだ良いか。

俺はビルの中に入って、エレベーターで最上階まで上った。

サイユウシティ高層ビル最上階、ポケモン協会ホウエン支部。
協会の会長とは知り合いなので、アポなし突撃でも大概は通ってしまう。……親の七光りって素晴らしいネ。
会議が入ってても待たされる程度だもんなぁ……。なんか親戚のおじちゃんの家に遊びに来た気分だ。

受付のお姉さんに俺の来訪を告げ、会長に面会できるかを聞いてみる。
……5分も待たずに『ＯＫ』の返事が……なんか不安にさえなってくる……。

「やぁ～！　久しぶりだね、カナタ君！　お父さんの付き添いで顔を合わせたくらいだから、半年ぶりかな？」
「ええ、そのくらいですね」

俺の肩にも届かない低身長、最近輝いてきてる頭頂部、どうにか残って側面を固めるアフロな頭髪、鼻掛けのような丸メガネ。
容姿に関しては、『ポケットモンスタースペシャル』に登場する会長にそっくりである。
コツコツ、と俺のそばによっては握手をして肩を叩いて俺の成長を確認してる様子。
こうしてみれば、ますます『親戚のおじさん』の感覚に陥るわけで、もうちょっと威厳を持ってもらいたい……。まぁ、この親しみやすさのおかげで協会のイメージアップなどに貢献してるわけだけど……。
しかし俺はちょっとこの親しみやすい中年男性に若干の苦手意識を持っている。というのも……。

「聞いたよ！　ついにトウカジムを制して、バッジを八つ手に入れたそうじゃないか！　これでついに『ポケモンリーグ』参戦の準備が整ったんじゃないのかい？」

ことあるごとに、俺にポケモンリーグへの参戦を要請してくるからだ。

「あの……俺、テレビで言いましたよね？　『参戦する意思はない』って」

「それでも君が闘う姿を見てみたい人たちはたくさんいる！　君はその人たちの思いに応えようとは思わないの？」

「思いません」

にべもなく切り捨てる。別に今更、有名になったところで調査の邪魔をされるのはうんざりだし、今俺が出てきたって、もう少しすれば『新星』が現れる。

そんな話をすれば、もちろん会長は食いつく……と思いきや。

「たしかに君の言う『新星』の存在は気になるね。けど、私は君が『一研究者』で終わるには惜しい人材だと、心から思っている」

……またか……。

この過度とも思える期待、これをかけられるのが、俺は好きじゃない。

前世じゃずっと周りからかけられた期待を裏切り続け、ついには（事故とはいえ）死んでリセットしてまた一から……なんてことになったからな。

期待を裏切り続けた自分が、前世の知識を持つがゆえに周りからさ

らに重い期待をかけられる。
あの『神様』、ちゃんと『前世の罰』も俺に与えてくれたか。
期待を裏切るくらいなら期待されない方がマシだと思って行動してるのになぁ……。

「君の実力なら『四天王』の候補としても申しぶんない。『新星』が君以上のトレーナーだとしても、君だって強いトレーナーなんだから……」
「『四天王』になる気もありません。それに俺の実力を買いかぶり過ぎです。俺より強い奴らなんて……」
「何人もいるとは思えない。

……君は君の実力を理解していない。自分を必要以上に貶めている。そして自分で自分を摘み取ろうとしている。
私は正直、君のそんな態度に腹が立つ！　強いくせに強くないと言い張るのも美学だが、自己完結した結論に浸っているのは我慢ならん！！

自分の力がどれほどのものなのか、試そうとは思わんのかね！　男なら、突き進んでみたまえ！！
その先に壁があれば越えて見せたまえ！！

……我々に「人はここまで来られるのだ」という新しい現実を見せてくれたまえ。
研究者なら、『限界を調べる』という題材にもなるかもしれんだろう？」

急に熱くなったと思ったら、冷静な声音で話しかけてきた。
会長直々の演説。覚めた心で聞いていたが、どうも何か燻ってきた

ようだ。
でも今のスタンスを変えようとも思えない。……けど。

「……わかりました。考えてみます」
「……そうか」

俺の返答に満足したのか、会長は優しく笑いかける。

「さて！　君がここに来たということは、何か気になることが起こったのかい？」
「はい。最近、ポケモンを利用した犯罪関連で気になるものがありましたので」
「『赤装束』と『青装束』の犯罪組織、かね？」
「ええ。何か情報があれば、と思って」

ポケモン協会はポケモン関連の出来事をまとめるデータバンク的な側面もあるので、たびたびお世話になる。
個人情報のようなものは、『ジムを攻略した』、『ポケモンを使って犯罪を起こした』などでない限り記録されることはあまりないが。
会長が、デスクの上にある端末を操作する。やがて検索がヒットしたのか、俺を呼んで端末の画面を見せた。

「一年ほど前から目撃例が報告されているな。それもホウエン地方の各地で。

一番最近の例は、トウカシティとカナズミシティの間にある『トウカの森』でおきた強盗未遂事件。
カナズミにある会社『デボンコーポレーション』の社員が襲われた。

相手は青い服装だそうだ。手持ちのポチエナを使って社員を脅し、何かを強奪しようとしたが、『何か』は不明。
さいわい、近くを通りかかったトレーナーが間に入り、青装束の男を撃退。社員は無事だそうだ」
「（『近くを通りかかったトレーナー』は、ユウキ君の事だろうな）
……どの目撃例も小規模ですが、ホウエン各地で報告されてますし、小規模の強盗団というわけでもなさそうですね」
「日付的にも『移動』のような形跡は見えないし、ある目撃例では『青装束と赤装束が、いがみ合っていた』というから、別々の組織、または派閥なのだろう」
「となると……」

確定（ビンゴ）。巨大な犯罪組織が二つ、ホウエンの内部に巣食っている。
この結論に、俺と会長は目を合わせた。

「奴らの目的は分からんが、各地のジムリーダーに報告して、治安の改善を指示しよう。
犯罪組織の方だが……」
「次に何をしてくるのかわかりませんし、下手に動くのはまずい。
俺がちょっと動いてみます」
「大丈夫かね？」

会長の顔に『不安です』とでかでかと書いてある。
たしかに、俺もまだ１６の小僧だ。けど

「こういう時に、ヒーローは現れるんですよ。俺じゃないけど」

俺よりもっと年下だけど、俺より強いヒーローが。
ヒーローだってピンチになるし、裏方は大事でしょ。

ヨカゼのボールを取り出して、会長室の窓を開ける。
さすがに高いから強風が室内に入ってくるが、ほとんど書類の無い会長室には特に被害はない。

「気を付けていってきなさい。……困ったら、大人に頼るのも一つの手だからね」

会長が右手を差し出す。
俺も右手を出して握り返す。

握手をほどいた瞬間、俺は窓から身を躍らせた。

吹き荒れる風鳴りがすごい……。
ボールを開いてヨカゼを出し、肩をつかませて水平飛行に入る。
ヨカゼにゆっくり飛ぶように指示をしてから『ポケギア』を取り出した。
ゲームじゃ金銀水晶以降は登場しない『ポケギア』だが、この世界では重要な携帯端末だ。
使用方法は……ややこしいので除外。結論から言えば、『使って慣れろ』。最初は戸惑う、とだけ言っておく。

俺が呼び出した番号は『ソラ』の番号。

『はい、ソラです。どうしました、カナタさん？』
「ちょっと仕事を請け負ったんだけどさ、けっこう手間取りそうだから手伝ってくれねぇか？」
『え、はい、わかりました』
「……即答なんだな」
『みんなもちょうど暇だって言ってましたし、良いんじゃないかな、と。……ダメでしたか？』

しおらしく答えんなよ、萌えるだろうが……。
耳に心地いい声だし、何より通話口での表情が目に浮かぶほど、彼女の言葉には感情がこもっている。
たまに電話して、通話口での表情を想像すると、たま～に悶えることも多い。

「……元々ダメなら連絡さえしないって」
『あぅ……そうでした……』

くっそ……犬の耳と尻尾つけたらぜってー垂れてるぜ……。

「とりあえず、俺はこれからミナモに向かう。時間も遅いし、明日にでも……」
『あ、大丈夫ですよ。今日はお仕事も早く終わりましたし、ジョーイさんと店長にはしばらく休むって連絡しますから、今日中でもミナモに到着しますよ』

ちなみに『お仕事』とはバイトのことだ。
ソラは一日ずつ交互にショップとポケモンセンターの手伝いをして

おり、評価も高い。半分正社員といってもいいほど。
業務態度が良いなら長めの休暇も取れるだろうし、なによりもうすぐ夏休みの時期に入る。
ポケモンセンターはともかくとして、ショップはバイト先の最有力候補に上がるほど競争率が高い。
学生などが小遣い稼ぎに大挙して押し寄せてくるので、ショップはアルバイト店員に任せる期間を『夏休み』と設定し、正社員に休暇を与える制度にしているらしい。

てか夏休みの間、店長だけ休暇が取れないことになるんだよな……
アルバイトであるソラにも夏休みをくれるらしいし、店長マジで良い人……。

「了解、ミナモのポケモンセンターに集合だ。俺の到着が遅れたら、連絡をくれ」
『わかりました。……お気をつけて』
「そっちもな」

心配そーな声音を出しやがって……悶える前にそっけなく通話をきっちまったぜ。
と、頭上でヨカゼが笑う声が聞こえる。

「ちっ……ヨカゼ、ペースあげろ。日暮れ前にはミナモにつきたいからな」

ヨカゼの応える声を聞きながら、考える。

(次に奴らはどう動く……奴らの目的は分かっている。ユウキ君が解決していくだろうが、それまで奴らの計画を遅延させられるかど

うか……）

「なんにせよ、動いてみなければわからん、か」

さいわい、こっちには原作の知識がある。奴らがどういう行動を起こすか、どういう行動を起こそうとしているのか、あらかじめ知っている。

問題はその行動を『同時に』起こした場合だ。

ユウキ君（主人公）は一人しかいない。片方にかかりっきりになったら、もう一方は誰かが押さえておくしかない。

……頼むぞユウキ君。俺たちは脇役だからな。ヒーローは遅れてもちゃんと登場するんだぞ。

朱くなりはじめた夕日をにらみながら、どこぞでいまだ戦っているであろう銀髪の少年に願った。

九話　物語は、動き出す（後書き）

一か月半以上ほったらかしにして申し訳ございませんでした。
お気に入りが１００件超えているにもかかわらず、このような有り体であることを深くお詫び申し上げます。

リアルで多忙な時期に入ったので、今後さらに更新が伸びていく可能性大です。
それに久しぶりに書いたので文章のレベルも落ちてる気がします。
でも完走はしたいんだぜ……。

今までずっと待ち続けてくださった皆様方に、百万の感謝と億万の謝罪を……。

次は……カナタとソラがイチャイチャするかも（殴
スポットはカナタの方に主にあたるので、ユウキ君が出てくるのは、カナタと絡んだり重要な事件が起こったり、はたまたハルカと何かあったりしたときになると思います（ぇ

ご愛読、心より感謝します！
ではっ！！

十話　人間、慣れって怖い（前書き）

今回はストーリーはそんなに（というか全然）進みません。
前回『イチャイチャするかも』とか言ってたら、ホントにさせちゃいましたよ……

中身のある話なんてほとんどしてないような気がします……

十話　人間、慣れって怖い

ホウエン本土最東端の都市、『ミナモシティ』

日暮れ前にポケモンセンターへと辿り着けた。
ソラはカイナシティで生活しているので、あの通信の後すぐに行動を起こしていれば、たぶん俺より先にここにいるはずだ。

ポケモンセンターは、ただ単に傷ついたポケモンを治療する医療施設であるだけじゃない。

旅をするトレーナー達のための宿泊施設や食事処（しょくじどころ）の提供、ポケモンリーグ等の各種大会やイベントの情報の配信、研究機関等と提携してポケモンに関する情報を発信したり、旅人同士の交流を促すための空間を提供したりと、ポケモンに関する様々な分野でトレーナーを補助する多目的な施設だ。

料金は勿論かかるが、それも旅人のふところ事情を把握した見事な料金設定だったりする。

ちなみに旅人の収入はポケモンバトルから得るものだと思われがちだが、それだけじゃない。

ソラみたいに各地のショップや施設でアルバイトしたり（ただしソラはカイナが中心）、賞金が出る大会に出場したり、公共機関に協力して『お礼』をもらったりと様々だ。

まぁそんな事はどうでも良いとして。

時間帯から察して、すでにソラは到着してるはずだが、連絡はなかった。

大方、連絡するのを忘れたとかだろう。ああ見えてドジな部分があるからな、あいつ。

（そうじゃなかったら、もしくは……）

少々不安になりながらも俺はセンターの中に入っていく。

すると、すぐに

「なぁ、いいじゃん。ちょっとお茶飲もうってだけだからさぁ」

「い、いえっ、ま、待ち合わせがっ……」

俺の偽装彼女がナンパされていた。

……なんだろう、すんげー面白くない……。

「いーじゃんいーじゃぁん！　君みたいな可愛い女の子を待たせる奴なんてほっといてさぁ」
「え、やっ、ダメですっ！」
ナンパ野郎がソラの腕を掴んで無理やり連れてこうとしやがる。
……やらせるかよ……。
「なっ、なっ、ちょっとだけ！」
「やっ！　イヤですっ！」
「まぁまぁまぁまぁ。ちょっとだけって」
「イヤっつってんだろ、阿呆（あほう）」
「「っ！？」」
ソラの腕をつかむナンパ野郎の腕をつかみ、思いっきり力を込めて握る。
フィールドワークで鍛えたこの体、なめんなよ。
ギリギリギリギリギリギリ……
「あだだだだっ！！」
「放してやれよ……放せよ……放せっつってんだろ……」
「さ、三段活用ですか……？」
ギリギリギリギリ……
まだソラの腕から手を離さないので、さらに力を込める。
ちなみに俺の握力、９０？近くあったりするんだよね。野外活動の賜物だな。
ギリギリギリギリギリギリギリギリギリギリミシミシミシ……

「わ、わかったっ！　分かったから放してくれっ！！」

ナンパ野郎の腕から嫌な音が発せられ始めて、ようやっとソラの腕を放す……最初からそうしろってんだ。

野郎の腕の握られた部分は、見事に俺の手形が真っ赤についていた。

ざまーみろ。

てかソラの腕にも手形がついちまってんだよ、どーしてくれんだ、コラ。

「このぉ……っ！」

……なんだよ、睨みつけやがって。逆ギレか？

上等だよ。

「俺のツレが世話になったみたいだな、ありがとよ」

ナンパ野郎を、殺気を込めて睨みつける。さっきのセリフも棒読みだ。

……ぶっちゃけ、ブラフだ。喧嘩は強いほうじゃないし、何か武道の心得があるわけでもない。

けど、殺気は本物。

……なんでか知らないけど出た。俺自身ビビったけど、おくびに出さずに更に睨みつける。

するとどうだろうか。

「ヒッ！？」

なんかビビって逃げ出した。なんだ、根性ねぇな。

野郎が逃げ出すと、ソラが寄ってきた。

「か、カナタさんっ！」
「おお、ソラ。待たせたか？」
「いえっ！　私も今来たところでしたよっ」
「そっか。まだ申込みとか出来てないんだな？　じゃあ、さっさと済ませるか」
「はいっ！」

ソラと同意して受付のジョーイさんのもとへ向かう。

この世界のジョーイさんは、端的に言えば服装だけアニメと同じなだけ。
みんな同じ顔なわけでも、姉妹なわけでもない。てか男の『ジョーイ』さんもいるし……。その場合の格好は、男性であることを尊重した造りになってるから、あしからず。

すなわち、『ジョーイ』とは総称や愛称のようなものであり、正式な名称は『ポケモンに対する治療資格所持者』という長ったらしいものだから、協会の方も『ジョーイ』という愛称は積極的に受け入れている。

受付のジョーイさんは女性だった。宿泊施設へのチェックインを済ませ、鍵を貰ってあてがわれた部屋へ。
……ジョーイさんがニヤついてたけど、なぜ？
てか、え、手に鍵が一本？

「か、カナタさん……」
「……おう」

「部屋……二つ頼みました？」
「……頼んだっけ……」
「せ、せめて、ツインベッドとか、ダブルベッドとか……」
「……あれ？」

あれぇ……？
鍵を開けて中に入る。

……うん、ベッドが一つのみ。しかもシングルベッド……。

「……すまん、ソラ」
「ええっ！？」

後ろに控えていたソラを振り返り、表面上は何も無いように見えながら冷や汗を垂れ流す。

「いつもの調子で頼んじまったから、部屋一つしか取れてねぇ……」
「えええぇぇぇ！！！！」

うん、ソラが叫ぶのも分かる。
だから早急にもう一つ部屋を取りに受付へ向かったら……

「申し訳ありませんが、今日は満室となりました☆」
「「……」」

☆つけんなよ良い笑顔で言うんじゃねぇ絶対申し訳ないとか思ってねぇだろ……。
色々突っ込もうかと思ったが気力がない……湧き上がる気配もない

し……。
いまだに受け付けのジョーイさんは、ニコニコしながらこちらの様子をうかがっている。
（（絶対に楽しんでる、この人……））
色々諦めて、ため息をつく。
「……わかりました、どうにかします……」
「っ！？　カナタさん！？」
「（どーしようもなさそうだぞ……それとも野宿するか？）」
「（それは……流石に……）……わかりました」
「はい、大変申し訳ございませんでした！　宿泊施設の料金は一名様の分で結構でございます！　お食事などでも割引いたします！　本当に申し訳ございませんでしたっ☆」
だから☆はやめろ……ぜってーこのジョーイさん、反省してないって……。
「……ハァ……」
「か、カナタさん、そんなに落ち込まなくても……」
「落ち込んでねぇよ……」
荷物を備え付けの机に置くと、俺は部屋にあった椅子に、ソラはベッドに腰掛ける。
今日はいろいろありすぎて疲れた……その疲れから来た溜め息を、ソラは俺が落ち込んでると勘違いしたらしい。

……落ち込んでなんてないよ、ホントダヨ。
ジム戦やったし、サイユウシティまでホウエン地方横断単独飛行もやったし。
……ホントに落ち込んでないってば……はぁ……

夕飯や入浴などは済ませたので、ある程度疲れは取れてるはずだけど、精神面での疲れはどうにかなっても肉体面で誤魔化しは効かないらしい。
そういう時はベッドに潜り込んだりして熟睡するのが一番なんだが、あいにく今回ベッドは一人用。

女の子には優しくする、それが我が家のモットーだ。だからソラにベッドで寝てもらおう。

「そ、それじゃカナタさんが……」
「俺には寝袋があるからな。それにダブルベッドじゃないから、二人で寝るには狭すぎる」

妥協策（なのか？）の案も潰しておく。単純に考えて男と女が一つのベッドで一緒に寝るってだけでも危険なのに、さらに体を密着させて寝なきゃならないようなシングルベッドは危険を飛び越えて地雷だ。
踏んだ瞬間、俺がソラの上司の眼前に引きずり出されてナニカサレそうな予感がビンビンする……。

もちろん俺は彼女に何かする気はないし彼女も進んでそういうことをする性格じゃないことをここに明記しておく。

……あ、ドタバタしすぎて、本来の要件をすっかり忘れてた。
俺がこうしてソラと一緒にいる理由は、『ある用件で協力してほしい』からだ。

二人して寝てしまう前に、概要だけでも話しておかないとな。

「なるほど。その『赤装束の組織』と『青装束の組織』について調査しようというわけですか？」
「そういうこと。協力してもらいたいんだけど」

説明が終わって、ソラが俺の話した内容を確認する。
改めて協力を頼んでみた。

「でも、それってカナタさんは『もう知って』ますよね？　それなら、何かあるたびにカナタさん自身が動けば……」
「それじゃ、俺がこの世界の『主人公』になってしまうだろ？」

あの爺さんは言ってた。『主人公にはなれない。なぜならその世界には、もう『主人公』が存在しているからだ』って。
つまり、俺がどう行動を起こそうが、全てが主人公のための行動に変わる。

「俺が何をしても変わらない。俺がいくら敵を潰しても、全てがこの世界にいる『主人公』の活躍への布石にしかならないさ」
「じゃあ、その『主人公』に任せておいたら、全ていつか片付くはずでしょう？　なぜ動くんです？」

「もしものため、さ」

俺がこの世界にいる時点で多少ばかり原作との『ずれ』が生じているようだ。『ずれ』自体は大したことないし、そのあと原作のルートにちゃんと戻っている。

ソラに聞いてみたけど、『過去の転生者たちが生まれた世界で、『原作がある世界』においていわゆる『原作改変』のような現象は一件の報告もない』とのこと。

統計的に0%だからと言って、今回もそういうわけとは限らないが、おそらく原作に沿って話は進むだろう。

しかし概ね(おおむ)原作通りとはいえ、『本来存在するはずのない存在』が存在する時点で多少の改変はあるだろうし、それが物語の根幹に響かないとも言い切れない。

だからこそ行動を起こす。

俺が行動を起こせば、俺が行動を起こしたことによって出来た『改変』を修正しようとする動きが現れるだろう。

神様がそうしているのか、『世界』というものがそういう存在なのかはわからない。

ただ、改変を修正するというのならば、ということは確実に原作通りにしようとするので、ユウキ君が必ず現れるはずだ。そして彼が事件を解決する。

「……つまり、ユウキ君が必ず活躍できるように、カナタさんは動くんですね」

「それだけじゃないさ。ポケモンには制限時間がなかったからな。ユウキ君が道草食ってたり足止めを食らってる時に組織が動き出し

たら、俺たちがユウキ君が来るまで組織を抑えてないといけない」

これが、俺が一番懸念する点だ。

ゲームならいくら時間を無駄にしても、ある一定の条件を満たさなければ物語は先へと進まないが、ここは現実（リアル）だ。

わざわざ組織が、自分の組織を壊滅させる存在を待ってくれるとは限らない。

「だから俺たちが足止めをする。ご都合主義ばかりに期待もできないし、ご都合主義を発生させるためにも俺たちの足止めは効果的だと思う」

「なぜ？」

「ヒーローは、みんなのピンチに駆けつけるって相場が決まってんだ。俺たちが危うい状況になれば、『ヒーロー』が助けにやってくるかもしれないからな」

その後はどこから調査するかを検討し、ユウキ君が訪れて、悪の組織とも遭遇するカイナシティに向かうことにした。

たしか行列作ってんだよな……けっこうシュールだったんだが、現実でもそうなのかねぇ……。

さて、就寝の時間だ。床に寝袋を広げ、もぐり込む。

寝袋はそんなに嫌いじゃない。全身を包まれる妙な安心感があるからだ。

ソラから許可を貰って、ソラの寝袋を枕代わりにする。

疲れがかなり溜まっていたのか、すぐにウトウトしてきた……おや

すみぃ……ぐぅ……

――――――

カイリキーの『りっちゃん』はちゃんと私の言うことを聞いて、カナタさんを静かに持ち上げてベッドまで運んでくれた。
私はカナタさんの体に布団を掛けると、持ち上げる際に落っこちてしまった私の寝袋を広げようと……

……りっちゃん、寝袋返してよっ

りっちゃんに寝袋を取り上げられちゃった……しかもなんかニヤついてない？
……そんなことない？　ほんとに？
で、でも、寝袋無いと私眠れな……ハッ！？

私の寝袋が無い→私の寝る場所が無い→ソファとかも無い→寝られる場所……ベッド→ベッドにはカナタさん→どうにかもう一人寝る隙間はある→つまり……

私が気付くと同時にりっちゃんがさらに笑顔になった。
……嫌な予感がして私の手持ちを振り返ると、ボールの中でみんな微笑んでた……。

「（で、でもっ！）か、カナタさんに迷惑が……っ」

思わず声が大きくなっちゃった。りっちゃんにも「しーっ」って言われちゃったし、ボールの中のみんなも同じジェスチャーで注意してくるし……。
でも、でもっ！！

「……まったく……おせっかいたいな、お前もお前のポケモンも」

私が混乱の極みに陥ると、後ろから声が……

って後ろっ！？

「かっ、カナタさん！？」

「……やかましくて目が覚めた」

「あっ……ごめんなさい……」

ものすごく眠そうな目でこっちを睨んでる……。

「でも、やっぱりかなり疲れてたと思ったので、やっぱりベッドに……」

「……はぁ……」

カナタさんは一つ溜め息をつくと、上半身だけ起こして私の腕をつかんで……あれっ、引っ張られて……

「わっ！」

……カナタさんに受け止められながらベッドの上に……。

「ちょ、カナタさんっ」

「……人の行為を素直に受け取らんお前の言葉なぞ聞こえん」

うわぁ、かなり眠いんだろうなぁ……声が掠（かす）れてる上にかなり不機嫌な声音になってる。

とりあえず抵抗してみるけど、むしろ抱きしめられて……っ！

「ちょうどよか抱き枕たい……こんまま寝るけん」

い、息がかかる距離にっ、カナタさんの顔が……どどど、どうしよっ！　し、心臓の脈拍数が大変なことにっ！
私の体は、ほとんど人間と変わりませんから、心臓もあるんですよ……って！　そんな場合じゃなかった！

「か、かなたさんっ！　ね、寝ぼけてないで放してくださいっ」
「ん～……寝ぼけとらんよ……お前やわらかいしあったかいし」
「い、今は初夏ですよっ！　暑苦しいですよ、一緒に寝るとっ」
「まだ夜は肌寒か時期ばい。ちょうどよか」

うぅっ、否定してるけど寝ぼけてますね、これはっ！
いつものカナタさんなら標準語でしゃべるのに、今はホウエン訛りが出て来てるんですからっ！

「カナタさんっ」
「……いい加減、諦めんね。俺はこのまま寝るけんね」
「あ、ちょっとっ……はぁ……」

宣言した通り、カナタさんはこのまま寝てしまった……。

カナタさんに言われたとおり、諦めて寝ることに……うぅ、カナタさんはもう寝てるから変な事しないとか分かってるけどっ……。
こ、この状況で寝られる気がしないよぅ……。

頬っぺたが熱くなるのを感じて、カナタさんの顔が直視できない……。
だからカナタさんの胸に頭を預けることにした。

ドクドクドクドクドクドクドク
……うるさいよぅ……眠れないよぉ……

ドクドクドクドクドクドク

……だんだん、落ち着いてきた……

ドクン……ドクン……

……そっか、これはカナタさんの……

そこで私は、意識を手放すことに成功しました。

翌日、俺が目が覚めても、ソラは起きる気配がなかったので、その

まま寝かせることに。幸せそうな寝顔だし、起こすのは野暮ってもんだろ。

……ああ、夜のことは覚えてるぜ。あの時の発言は全部、俺の意思によるものさ……。

ホウエン訛りだったのは、本当に半分寝ぼけてたのもある。

俺は標準語を『意識して』しゃべってるからな。俺の前世の出身自体がこの世界のホウエンにあたる地方だったのもあってか、脳内で思考するときはホウエン訛りの方がやりやすいし、ホウエン訛りの方がしゃべりやすい。

だから、ああなっただけさ。

ふと、机の上に一枚の紙が……嫌な予感しかしないのは俺だけか？

裏返してあるようなのでひっくり返してみると

『昨晩は、お楽しみでしたね☆　ジョーイ』

……あんの受付嬢かぁぁぁぁぁ！！！！

……大声を出せばソラが起きてしまうので、全ての怨念をぶつけるかのように紙をバラッバラに引き裂いた……

あんにゃろう……憶えてやがれよぉ……

ひっさびさに怨念を垂れ流した、初夏の朝だった。

十話　人間、慣れって怖い（後書き）

はい、本当に進みませんでした。すみません（土下座
ちなみにソラもニックネームをつけるようです。ほとんど名前から取ってますが。
次回には他のポケモンも紹介できるかな？

なんか……これ……大丈夫かな……前回がシリアス風味だったのに、今回はものっすごいギャグというかコメディというかそっち方面に走ってしまった……

そして初の女性視点！
男の俺には、女の気持ちはわかんねぇ！（血涙
しかし三人称視点てけっこうむずい……（自分にとっては

ていうかこの小説も書きあげてないのに『リリなの小説書こうかな』とか考えちゃってるんですよこの人っ！　原作そんなに見たことないくせにですよっ！
そんな暇あるんならエメラルドプレイしてストーリーもう一回確認しろって話ですよ！　もう作者バカですね！

……はい、書きたい小説いっぱいあります。でもそれって他の皆さんの小説を読むたびに湧き上がってくる衝動なんですよね。
自分、オリチャラ好きだから、皆さんの小説読んでく内に『こんなキャラいたら面白いかも』とか考えて、無性に書きたくなる。

でもそれって言うなれば『勢いだけ』なんですよ。
最初は調子よくアイデアとか浮かんでバリバリ書けますけど、少し経つとネタも勢いも尽きてチビチビ更新もままならなくなるような

状態に。

この小説もそうです。最初は勢いだけでした。その反動が今の状況です。

ほぼ一ヶ月に一回に落ちた更新スピード、中身の内容の無さ、クオリティの低下。

所詮、この程度だったんだなぁ、と痛感してます。

そんな状態でも１００件以上お気に入り登録をして、なおかつ登録を解除しないでくれた皆様方に、感謝を申し上げます。

この小説、亀の歩みのような展開となるかもしれませんし、しかも鈍足更新です。

それでも最後まで頑張って書いてみるつもりです。

もしかしたら別の連載やるかもしれませんしやらないかもしれません。

でもこちらは最後までやります。

長々と失礼しました。ではっ！

十一話　港町にて（前書き）

今回も前作に続いてカナタとソラがイチャイチャするだけになりました。
正直すまん……ｏｒｚ

十一話　港町にて

俺たちが二人で話し合った街『ミナモシティ』に次ぐ港町『カイナシティ』。

貨客船の発着が行われる港や船を作る造船所、近海で取れた食材やカイナの特産物を売る出店、海に関する研究を展示している『海の博物館』などの施設が存在している

ここは浜辺が綺麗なことで有名で、観光客、海水浴客、水ポケモンの使い手たちが訪れる名所だ。

それに貢献しているのは一人の老人とそのじいさんのポケモン『ジグザグマ』だったりしていて、そのジグザグマの特性の一つである『ものひろい』がいろいろ役に立っているらしい。

そんなわけで、いつも浜辺にゴミ一つなく、この街の蒼い海と空は守られている。

「まぁそんな綺麗な空も海も、散々なことになっていくんですけどねー」
「……カナタさんが言うとシャレになりません……」

というわけで現在、俺たちはカイナの浜辺の上空を遊覧飛行中だ。

……目的？　もちろん、水着美女をこの目に「カナタさん……」何でもありませんすみません冗談ですだからエアームドさんその『ソラというものがいながら……』みたいな目で俺を睨まないでてかスピードスター撃とうとしてるよねやめてね生身じゃ死ぬと思うよわりとマジですんませんでしたッ！！！

ソラさん、どーにか宥めてもらえませんか！？

エアームドの背に乗る空色の髪の少女に、助けを求めてみたんだが……。

腕を組んで少し考え事をしてらっしゃる。

熟考の後……

「……私、実は水着持ってきちゃったんです……」
「……へっ……？」
「お休みもらったので、久しぶりにみんなと一緒に海に行こうかな

って……でもカナタさんが呼び出したので計画は延期したんです……」

「……で？」

「ボールに入れっぱなしだったので、いい加減みんなも外に出たがってると思います」

……つまり『海に行って遊びたい』、と。

「はいっ！」

……いー笑顔だ……どっかのポケセン（ポケモンセンターの略）のジョーイみてぇにな……。

あんにゃろうは呼び出して鉄拳制裁してやったが……。

……まぁ、ソラならいいか……。

ソラは、異常なまでに無欲だった。

おそらく俺への負い目だろう。俺がソラのために何かしようとするたびに『自分でやる』、『自分で買う』とか言っては俺の協力を拒み、一時期は餓死寸前の状態まで陥ったり。

『天使』とは言え腹は人間と同じように減る→収入がないから食料が買えない→食い物がない→餓死寸前

とまぁ、このような一連の大事件の後、渋々とはいえ俺の支援を受け入れ、俺の仲介でカイナのフレンドリーショップでアルバイトするようになった。

それからは、だいぶ頼られるようにはなったが、『わがまま』を言

われたことはこれが初めてだ。
多少回りくどかったのは俺への遠慮か、それとも策略か？

「……策も遠慮もしなくても、俺はお前の頼みごとなら何でも聞くけどな？」
「っ！！？？」

おーおー、顔真っ赤だ。可愛らしいのぉ。

「で、でもっ！」
「『また俺に迷惑が』ってか？　いい加減、聞き飽きたっつーの。この世界に住んでいる限り、お前もこの世界の一員なんだ。この世界の住人が、この世界の住人を頼って何が悪い。

お前は厄介事を抱え込み過ぎる。俺ってそんなに頼りねーの？」
「いっ、いえっ、決してそんなことはっ！！」
「じゃあ頼れ。お前が頼るんなら、俺は俺のできる最大限でお前を助けるからよ」

おお、今度は目の端に涙が。……俺、良い事言ったっぽい。
ちょっと鼻声になりながら『ありがとうございます……』だって。

まったく……だから女性は苦手だ……嫌われたくないからご機嫌をとりたくなる……。
……『いやなこと』を思い出しそうだ。一回だけ頭を振って『それ』を頭から追い出した。
さて、なるべく元気な声を取り繕って。

「おし、今すぐに、とはいかないけど、ある程度の調査が終わったら遊ぼうぜ」
「はいっ！！」

鳴いたカラスがもう笑った。まぁ、女の子は笑っている方が良いからな。

さてと。何はともあれ、早く遊ぶために調査をしよう。
ソラが住んでる集合住宅（と言っても1階建ての長屋のようなところ）のソラの部屋の前に降り立つ。
港の近くで、磯の香りが何とも言えない。海に背を向ける形で玄関があり、数はおよそ２０戸あるかないかってくらいか。

まずは――――――――っと、なんだ？　ポケギアが鳴りだした。
番号が表示されるが、見覚えがない。

「はい、もしもし」

いぶかしみながらコールに出てみる。オレオレ詐欺じゃありませんように。

『あ、もしもし、カナタさんですか？』
「ん……？　その声は……もしやユウキ君かい？」

『……間が長い気がしたんですけど……』
「しかたないだろ、最近はろくに名前も出て来てなかったんだから」
『……メメタァ……』
どこで耳にした、その単語。
まぁそれよりも。
「どうやって俺のポケギアにかけてるんだ？　ポケギアさえ持たずに出発しちゃったじゃないか」
ただ単に気づかなかっただけなんだけどねー。
しかしママさんはそれに気付いてもなお、
――――――風の便りで聞くでしょうから大丈夫よ。昔から『便りがないのは元気な証拠』っていうじゃない？――――――
……なんという肝っ玉母さん……。
『ポケナビって知ってますか？』
「ん？　……ああ、最近、デボンコーポレーションで発売された、あれか」
この世界、というかこの地方のポケモン関係で『デボンコーポレーション』の製品を使わない人は無い。
ホウエンにおけるポケモン関連の製品をほぼ独占している企業だ。
俺もボールやら傷薬やらと大変お世話になっている。
そのデボンコーポレーションが発売したのが、『ポケナビ』だ。正式名称は……なんだっけ。忘れた。
ホウエン地方のマップを標準装備しており、ポケモンのコンディシ

ョンを把握したり情報を表示するなど、ポケモン図鑑に近い性能を持っていて、ついでに多機能でもある。

まぁ、ほぼワンオフに近い『図鑑』と比べると、情報の精度に差があったり耐久性や信頼性に多少問題があったりするし、『実生活』に重きを置いた分、ポケモン系統の様々な機能が備わっていないなど、ポケモン関係の性能において『図鑑』の数ランク下に位置しているようなアイテムなんだけど。

ただし日常生活においてはかなりの汎用性を持っていて、一言でいえば前世で話題になってた『スマート・フォン』のような立ち位置だ。

つまり俺が使ってるような『ポケギア』は普通の携帯のような扱いになっていて、利用者はほぼ半々に分かれていたりする。

理由はやはり信頼性や耐久性の問題が多く、まさに『利便性が高いが壊れやすいポケナビ』、『扱いやすく壊れにくいが不便なポケギア』と見事に色分けがなされ、冒険したり野外活動が多い人はポケギアを、移動、特に冒険などをすることがほとんどない人はポケナビを所持することが多い。

そんな『一般市民向け』とも言える品をユウキ君が持ってるのは、

『偶然、デボンの社長さんと面会できて、その際にこのポケナビを貰ったんです』

「へぇ～……ツワブキ社長と、か」

ツワブキ社長。

身一つで大手企業デボンコーポレーションを立ち上げた敏腕社長にして、石集めが趣味というちょっと変わった人。

俺も面識はあるし、知り合いだ。親の七光バンザイ。

しかしジムリーダーの息子とはいえ大企業の社長とコネを持てるなんて、将来ユウキ君が大物になりそうな予感がビンビンするなぁ……。

「しかし『旅人』のユウキ君にポケナビはまずいんじゃないか……海とかで落としたら台無しじゃないか」

ポケギアは基本的に『旅人向け』だから防水加工やら耐衝撃性能その他諸々は十分に備えられているが、ポケナビじゃそうはいかないはず。

『最近、デボンの方で『旅人向けのポケナビ』を開発していて、その試作品――――――といっても5作目くらいらしいんですけど、そのモニターになってくれって』

なるほど、『試作品』か。それも5作目、ともなれば『開発陣の中』で思いつく限りの対策を施し、『研究所での実験』の成果を反映させた最終段階に相当するような代物のはずだ。
あとは『実地での実際の使用』で露呈する不具合の修正をすれば完成ともいえる。

言い方は悪いがその『実験台』にユウキ君が選ばれたわけだ。ユウキ君が使用していくうちに見つけた不具合を開発陣がすぐさま次世代機にフィードバックすることで、より完成度の高い製品が完成するわけだし。

「で、使い心地は？」

『今のところ、不具合とかはありませんけど、ちょっとかさばりますね……』

まぁそれは仕方ないだろう。様々な機能を詰め込んだ結果、小型化が難しくなって少々携帯するには大きいサイズになってしまってるんだからなぁ。
さて、それよりも。

「どこで俺の番号を知ったんだい？」
『ああ……ハルカ……さんが』
「呼び捨てで良いよ。気を遣わなくても、気にしてないから（いつか義兄弟になるだろうし）」
『……ハルカ、と久しぶりに会ったのでバトルしたんですけど、そのあとポケナビにハルカのを登録して……』
「ふむふむ……」

ハルカの番号をポケナビに登録した後、『お兄ちゃんのも教えてあげるね！』と言われて俺のを登録したんだそうな。
で、その後センリさんからのコールでセンリさんのを登録。その後、一旦ミシロに戻ってママさんと親父のを登録した、と。
すでに道すがらで出会ったトレーナー達の番号もいくつか登録してあるらしい。

俺に出会えれば御の字だったらしいが、その時はあいにく俺はミナモにいた。

『で、カナタさんに報告しようと……』
「なるほど。で、今どこだい？」
『ムロタウン、というところに来てます。カナズミシティで社長さんに『お使い』を頼まれまして』
「『ダイゴ、という男に手紙を渡せ』って？」

『えっ、何で知ってるんですかっ！？』

あっ……思わず口が……よし、『ダイゴ』さんとも知り合いだし……。

「息子さんが『ダイゴ』って名前でさ、俺も会ったことあるし。あの人すごいトレーナーで、社長さんが秘密の頼みごとするとき『お使い』っていって手紙を誰かに託してダイゴさんに知らせるんだ」

俺も何度か『お使い』を頼まれたこともあるし。

事実があれば多少の捏造は真実にもなりえるっ！　マンガからの受け売りだったと思う、たぶん。

真実が一つしかないんだったら、誰かがその『真実』を作る前に自分で作ってしまえばいいだけさ。

『へぇ……カナタさんって顔が広いんですね』

「ま、ほとんど親父のおかげだけど」

親父が有名人なら何かの会合とかパーティとかにも結構呼ばれるし、それに俺がついて行くと高確率で紹介されるから俺の知名度も、それなりに高い。

……まぁ、そのおかげで本当に自分で作った知り合いってのも少ないんだけど。

いるとすれば……ミシロのみんなと、今横にいるソラと、ハギ老人と……あとは今話してるユウキ君くらいか。

『……そう、ですか……』

ユウキ君の声が暗くなったけど、これで話題はそらせた。

「まぁ、そう気にするなって。これからもっといろんな人に会うんだろうし、その中で俺の事なんてほとんど知らない奴も出てくるかもしれない。
人生何があるのか分かんないから面白いんだ。俺は人生を楽しんで生きてるだけ」
『……』
「……」

……ん？
ユウキ君はとにかく、ソラまで固まってる。

「とにかく、今は君がやるべきことを成せばいい。そしたら『やりたいこと』をやろう」
『……分かりました。ダイゴさんという方に手紙を届けます』
「ん、がんばってね。終わったらちゃんと社長さんに報告すること」
『分かってます』

ユウキ君との通信が切れた。

……さて、問題はこっちだ。

「……」
「……」
「……ソラさん？」
「……ですか？」
「はい？」
「……今の人生、楽しいですか？」
「え、ああ、うん、楽しいけど」

……はぁ……。

「わ、私のせいでっ……前の人生が終わっちゃってっ……その人生もっ……楽しかったはずなのにっ……！」

……ホント、メンドくせぇ……。

「私が終わらせちゃったのにっ……なのに……わっ！？」

「――――――――――――――――いい加減にしろっての」

ソラの震える肩を、そのまま抱きしめる。

笑ったカラスがまた泣き始めたのに少々苛立っていたせいか、声が低くなってしまった。

一瞬肩の震えが止まったが、ソラの肩はまた震えだす。……大方、俺の低い声に『怒ってる』って思ってビビってんだろーな。

「ぉ……お、怒って……ます？」

「おー、怒ってる怒ってる」

潤んだ瞳に上目使い。何それ最終兵器？　威力バツグンなんですけど。……鼻から何か出そうだったけど根性で押しとどめたぜ。

そしてわざと『怒ってる』と肯定する。

――――――ほれ、目論見どおり、アワアワしだした。

「ぁわっ……ぁ、わっ……えと、えとっ！」

「今度ばかりは許さねぇぞ」

「――――っ！！」

少し体を離して目を見つめると、『何をされるのか』と顔が真っ青

になりながら弁解しようとして言葉が見つからず、揚句の果てに目が回り始める。
マンガの如く目に渦が出来そうな頃を見計らって

「いつも『気にすんな』っつってんのに聞かないからなぁ……」

そう言ってソラの額に自分の額を押し付けた。
ソラの顔色が青から赤に一瞬で変わる。

「ぇと、ち、近いですっ！」
「人が『やめてくれ』って言ってんのにやめてくれない奴の言う事なんて聞こえないぞ」
「〜〜〜〜っ！！」

まさに茹蛸の如くまっかっか。
ついには恐怖のためか、目をつぶっちまった。

……だいぶ怖がらせちまったか？　反省反省。

「――――――――――とまぁ、お前はそういうことをやったわけだ」
「――――――――――ふぇっ？」

ソラの体を解放してやる。唐突の事態に、ソラの目は白黒しはじめた。

「お前が俺の事に関して負い目を感じているのは分かる。俺もおんなじ立場ならお前と同じように償いとして何でもやっただろうな。けど、俺はお前を恨んじゃいない。お前がどう思ってようがそれは

事実だ。しかも、俺はこの世界が気に入ってて、しっかり生きてる。

――――――――『悩むな』とか、『忘れろ』とかは言わない。
お前だっていつかは『天使』としての仕事に戻るんだろうから、その時の教訓にするといいさ。
けど、『今』の俺の事は、終わったことだろ。

お前がどれだけ悔やんでいようが、俺が元の世界に戻ることはない。
じゃあ『今』生きてる世界でできるお前の『償い』ってなんだ？」
「……えとっ……カナタさんを手助けすること……ですか？」

不安げに俺の目を見て答えるソラ。
目が真っ赤だ。必死に涙をこらえてるんだろう。

「俺に聞くなよ」
「あぅ……」
「それが、お前ができる『償い』だ」
「……えっ……？」

一度は突き放したような俺の声に一度は落胆するが、すぐに発せられた言葉にソラは反応した。

「俺に償うために、俺を手伝う。それがお前の中での『償い』なんだろ。
他にもあるのならやれば良い。俺に許可なんて求めなくても良いさ。
お前が『償い』だと思って真摯に行動するのなら、俺が止める謂(いわ)れはない。

――――お前は一人で抱え込み過ぎだ。自分だけで悩んで、自分で勝手に結論付けてしまって、こうなった。

俺に頼れ。みんなに頼れ。一人で立つのも立派だが、支えられて立ち上がることは悪くないだろ。

お前が苦しいときとか、何かを吐き出したいとき、俺に言え。いつでも聞いてやるよ」

なんたって、お前の『彼氏』だからな。偽装だけど。

そんなこと言えば、ソラの顔は真っ赤になる。

けど、笑顔も戻った。

『恋人ごっこ』やってんだ、それらしいことぐらいしても、かまわねぇだろ。

――――――――さってと。

「……てめぇら、その手に持つカメラの類を俺に寄越しな……」

「ふえっ！！？」

黒いオーラが、俺の全身を包んだ……気がした。

ソラもようやく周りの状況に気付いたようだ。

――――――――玄関を開け、カメラを構えた長屋の住人たちの姿に。

どうやらオレたちの様子を一部始終抑えていたらしい。ニヤニヤして一向にカメラの類を差し出す気はないようす。

――――――――――――――――――――よし。

「半殺しで勘弁してやるぜぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

「あっ……カナタさん落ちついてぇぇぇぇ！！」

一時間ほど追いかけ回したのち、全員分を回収、メモリーから該当部分だけを削除して返却した。

ぶっ壊さなかっただけありがたいと思え……。

少々疲れた思いをしながら、ソラとともにカイナ近辺の調査に向かうことにした。

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

「……タナカさん、コピーは？」
「……マイＰＣに入ってる。時間稼ぎサンクス、スズキさん」
「……なんのなんの。我ら『ソラちゃんの恋路を応援する会』はあの程度の脅しと形相に屈するわけがない。
――――――――――ションベンちびりかけたけど」
「あれがソラちゃんの本命か……さすがに『天使』ソラちゃんを射止めるだけあって、イケメンだな」
「フクダさんか。そう、あれがソラちゃんの想い人。本名は『オダマキ・カナタ』という」
「うぇっ！　あの『オダマキ博士』の息子の！？」
「マジもマジ、大真面目だ。さっきの騒ぎの間に、ポケモン協会に写真を送ってな。名前程度だったが返答を貰ったのだ」
「あ、聞いたことある。『チャンピオンになれるのにならない男』だって。５年くらい前に７か所のジムを制覇して、つい先日には８か所目も制覇。最速でバッジを８つ所持したトレーナーだってさ」
「現在は１６歳だったはずだから……１１歳のときにはバッジ７つ持ってたってことか……」
「ジムリーダーの試合って３対３だけど、無傷で３タテ（三連勝）したことも１度や２度じゃないらしいぜ」
「ポケモン学会の方でも、注目株の人材だな」
「サトウさん？」
「『ポケモン図鑑』を与えられていて、父親であるオダマキ博士を手伝って全国でポケモンの調査を行っているらしい。
ちなみにみんながポケナビや紙の図鑑で目にしている説明文も、ほとんど彼と妹であるハルカちゃんがやっているんだ」
「さすがＡ大学で研究者やってるサトウさんだな」

「それに対して我らが天使、ソラちゃんは……」
「この近辺にある『フレンドリー・ショップ』と『ポケモンセンタ

ー』でアルバイトをしている。とくにポケモンセンターでは『天使のジョーイ』として人気が高い」

「寄ってくる虫は多いが、伝家の宝刀『私、恋人がいるんです』でバッサリ両断」

「しかし実は『好きな人はいるが、付き合ってない』状態なんだな、これが。

証拠として、我が妻（もちろん会員）がさりげなく聞いてみたところ、『付き合ってる人はいません。そういうことになってる人はいますけど』との返答！」

「しかも『そういうことになってる人はいます』ってところでめっちゃ赤面してたんだろ？　おそらく偽装の類だったのが、いつの間にかソラちゃんの方が本気になってたパターンだな、これは」

「お前、いつもは妄想ばっかで妄言垂れ流してっけど、今回ばかりは同意せざるを得ないな……でなきゃ、さっきの光景の意味がわかんねぇよ。

ソラちゃん顔真っ赤だったけどカナタ君の方はどうもなさそうだったしな」

「ばっか、カナタ君の方もそうとは限らないだろ？」

「ふむ？」

「あの『天使』ソラちゃんがそばにいるんだ。もしかしたら、もう惚れてるのかも？」

「あー、ならあの額を引っ付けたときの意味が少々変わってくるな。もしかしたら、勢いに任せてキ」

「おーーーっとぉ、そこまでだぁ……」

むさくるしい男たちが集まった一室にて行われていた会合に、乱入する一人の男。その手には、モンスターボール。

「お、お、おおお……お前はっ！」

「ど、どこまで聞いていたっ！？」
「……あん？　最後の一行ぐらいしか聞こえなかったけど？」
「な、ならばよしっ！！」
「……いいのか。

んじゃあ……吹っ飛べよぉ！！！」

長屋の一角の窓から閃光が漏れ、爆発と同時に、髪型がアフロになった男たちが窓から一人ずつ吹っ飛んでいき、海に落ちた。

犯人は分かっていない。

「調査っつっても、何すりゃいーんだろうな」
「えっ！？」

わり、何も考えてなかったぜ。

十一話　港町にて（後書き）

話全然進んでねぇ……ｏｒｚ
久しぶりの更新なのにそりゃねーよ……
暇もねぇのに新しい連載も始めやがりましてこの低能がっ……
やる気あれば半月後にもう一回あげるかも……でももう片方が全然進んでないからそっちに注力する可能性大……でもこっちもやりますよ……気長に待ってやってくださいまし……

次はカイナの調査の話のはず……

それではっ！（逃

「……スピードスターな」

……ん？　後ろから殺気が……って何あれっ！？

アッーーーーーーーーー！

十二話　調査（前書き）

明けましておめでとうございます（激遅
新年一発目がこんな時期でこんなものｏｒｚ

十二話　調査

カイナシティから北に少しの地点。
１１０番道路の入り口に程近い場所で、俺たちは足止めを食らっていた。

「……あれ、なんなんだろうな？」
「わ、私に言われても……」

俺たちの目線の先には、一列に並んだ青装束の連中。
あれが足止めの原因だ。

よーく見れば頭に巻いたバンダナに海賊の髑髏（どくろ）をモチーフにしたような【Ａ】のマーク。

間違いない。

「……『アクア団』だ」

「アクア団、ですか」

エメラルドをプレイしたことの無い人にはネタバレになるかもしれないが、説明しておこう。

アクア団とは、リーダーの『アオギリ』という人物を中心とした、簡単に言えば『海を広げる』という夢物語のような構想を掲げる組織で、その目的のためには手段を選ばない。

まぁ転生前の俺の世界じゃ、地球温暖化だなんだって海面上昇は避けるべき項目だったりするんだけど。

この世界には温暖化や海面上昇などは起こっていない。『海を広げるために活動している』なんて言えば、笑い者にされるような世界だったりするわけだけど。

けど奴らは、表舞台には上がらないけど目的のために活動してる。『笑い者にならないだけの、確固たる方法』を考えつき、それを実行しようとしているのだ。

つまり、実行できるだけの確証もあるに違いない。

それが、『超古代ポケモン』の存在。

「超古代ポケモン？」

ソラが小首をかしげる。可愛いなおい。
いくら俺が転生者だと知ってるとしても、ソラはゲームの内容までは知らないから、こんな反応だ。
そしてこの世界の住民も、一部を除いたほとんどが『超古代ポケモン』の存在を知らないといっても良い。元いた世界でいう、恐竜のようなものだからな。テレビでたまに特集されるくらい。
知名度だけで、実際はどのようなものかは知らない。それが世間一般の認識だったりする。

けど、少し前――――――――――――――具体的にはトウカジムでジムの設備を説明した時に言ったと思うが、ポケモンはその体内に莫大なエネルギーを秘めているのだ。

個体や種族ごとにばらつきは当然あるけど、まぁ少なくとも、軽くバトルしてるフィールドの天気を左右したりするくらいには。

「……でもそれが『海を広げること』と、どう繋がるんですか？」
「考えてもみろよ。例えば『あまごい』って、どうやって雨雲作っ

てるんだよ」
「えっと……近場の水辺を使ったり、ポケモン達が体から水を出したり……
――――――――――――――――――あっ」
「そゆこと」

ソラが出した二つの方法のうちの後者は、水源が無い状況で繰り出す場合の方法だ。
つまり、水が無い状況でも水を作り出せる。

ということは『水を短期的にではあるが、元手が無い状態でも増やせる』のだ。

「そ、それってつまり！」
「……ポケモンがすっからかんになるまで水を吐き出させれば、まぁ少しは足しになるかな」
「まさか、そんな方法で！？」
「……一回やりやがったよ、あの野郎ども」

このことを思いついた時、真っ先に『衰弱した水ポケモンの発見例』を調べてみたが、自然環境の変化が起こった以外にも『人の手による無茶な行動』ともとれる例が多数起こっていた。
保護したポケモンが盗まれたものだったこともあったくらいだ。

「この時、俺は確信したね。

――――――――――――――――――――――――――――――あいつら、バカな上に狂ってやがる」

「そんな……」

「……で、奴らが失敗した先に辿り着いたのが、『超古代ポケモン』の一角、カイオーガだ」

カイオーガとは、太古の昔に存在したとされる、強大な力を持つと言われた伝説のポケモンの一匹。

説明がやけに心もとないのは、資料となるものが古代の人々が書き残したいくつかの文献や石版ぐらいしかないからだ。

化石も何も見つかっていないし、そもそも存在したのかさえ怪しいと唱える説もある。マイナーな学説だけど。

ちなみに『超古代ポケモン』はこの地方には3匹いる。『伝説』の名を冠するポケモンは他にもいたりするのだが、こちらも例に漏れず資料不足で詳しいことは分かっていない。

さて話は戻ってこの『カイオーガ』だが、どういうポケモンなのかと言えば

「大昔に海を作り出した、と言い伝えられてきたポケモンだ」

「海を……」

「ま、前世で言う天動説とか『混沌』説に近いようなものだな」

一種の信仰や神話のようなもの、と言えばいいのだろうか。

地方によっていろいろ差異があり、このホウエンでは超古代ポケモン『海』のカイオーガと『陸』のグラードンがこの大地を作り出した、とする神話のような伝承が有名だ。

まぁ、結局はやっぱりこの世界も一個の惑星だったわけで、今の地形は地殻変動の影響で現在の形になった、と、前世の世界とそう変わりはない。

「じゃあ、『海を作り出す力』はカイオーガには無いのに、伝説を信じてカイオーガを探し出して、海を広げようって考えてるんですか？　正気じゃないですよ……」

「人のこと言えるかよ……。

俺にとっちゃ、お前達の存在自体が『伝説』……いや、『神話』や『おとぎ話』の話だからな。自分が生きていた世界の常識が、根底からぶっ壊された気分だったよ」

「えと……そ、そんな大層なものじゃないですよ……」

いや、死人の魂集めるって時点で大層だろ。

ま、それはそれとして。

「伝承によれば、カイオーガは常に雨雲を発生させていたらしい。それも、台風に匹敵するほどのな」

「……『自分でも抑え切れていないパワー』があふれ出ているわけですね。つまり、それだけの莫大なエネルギーを内に秘めている、と」

その通り。とくせい『すなおこし』を持つバンギラスが良い例だろうな。

器に収まりきらないほどのその莫大なエネルギーを『海を広げることに使おう』というのが、このアクア団の狙いだろう。

……どんな狙いがあるのかは知らないけど、とりあえずこれだけ言っておこう。

「研究者としての視点から見れば、やめてほしい行為だな」
「どうしてです？」
「簡単に言えば、生態系への影響」

この世界、実はポケモン以外の動物もいる。見えないところで捕食されたり、俺たちの食糧にもなっていたり。
いわば、この世界の裏方だ。

その裏方に、もろに影響が出るとどうなるのか。

便宜上、ポケモンと人間以外の生物を『裏方』と呼ぶことにする。

俺が『生態系への影響』を懸念するのは、以下の通り。

なんで海水が塩っ辛いのかと言えば、当然の如く塩分を大量に含んでいるから。なんで塩を含んでいるのかは聞かないでくれ。筆者の知識が貧相ですまない。

話を戻して。

海洋性生物はこの海の塩分濃度に合わせた体になっているが、ポケモンたちは海に住むポケモンも川や池などの淡水にすむポケモンも、得意苦手はあるものの淡水、海水には適応している。
何ら問題は無いように見えるが、問題は海や川に住む裏方だ。

これら裏方は環境に体を合わせているがゆえに、『現在と異なる環境』に変化した際、大抵の場合は環境に抵抗できずに数を減らしてしまう。
そうなった場合、この裏方たちを餌としていた海に住むポケモンたちはエサが取れないために移住を余儀なくされ、影響の少ない河川地域へ移動する。

しかしそこにも川に住むポケモンたちはいるわけで、さらに新しく多数のポケモンを受け入れれば、その地域で養えるキャパシティは軽く凌駕し、エサの不足に陥ることに。
そうなれば、わずかな餌を巡っての争いや弱い種族や個体の淘汰によって、維持されていた生態系が崩壊してしまう。
最悪の場合、絶滅してしまうポケモンも出てくることになるだろう。
だから、どんな考えかは知らないがやめてほしいと思っている。

長ったらしい持論を俺が言い終えると、隣でソラがポカンとしていた。

「……どーした」
「カナタさんが……学者さんみたい……」
「学者の子だからなッ！」

手加減して、拳骨くれてやったぜ。

あれから少し。

道をふさいでいた奴らはそのまま話し込んでて動きそうもなかったし、ほっとくことにして、俺たちは今ポケモンセンターで昼食の真

っ最中だ。
こっちから近接に徒歩で行こうとする人にはかわいそうだけど、自転車か空を飛ぶポケモンを貸してもらうことを進める。

「カナタさん、調査ってこれだけですか？」
「ん～、あと一ヶ所だな」

昼食の前に『造船所』にも寄ったしな。

クスノキさんに、接触してきた団体や個人の名簿を見せてもらって、それをポケモン協会の方に（コピーを）送った。
クスノキさんには『あなた根っからの善人なんですから、詐欺とかに引っかかってそうなので』と半分本気の忠告という形に。
あの人もあの人で『ああ、そうだね。ありがとう』なんて言うもんだから、両親が針で刺される感覚がした。

ま、だから町の人からもあんなに慕われてるんだろうな。

「最後の一ヶ所って、どこなんですか？」
「ん？　――――――

さて、昼食も終わって。

「……なるほど、デートスポットですか」

「雰囲気もあるし、静かな大人のデートスポットってところだな」

俺たちの真ん前には、立派な建物。

すぐ脇の看板には『海の化学博物館』と書かれている。

造船所で話したクスノキさんが館長をしている、海をテーマにした博物館で、主に展示しているのはクスノキさんが『艦長』をしている『潜水艇』で調査してきた海に関する知識や発見だ。

その他にもクスノキさんには写真の心得もあるらしく、博物館の一角には、クスノキさんが今まで撮りためたカイナの写真も展示されていたりする。

全体的には博物館でありながらも、知識を楽しく学べるようにと工夫もされており、またセンスの光る内装から、広い年齢層に親しまれているデートスポットであったりもするのだ。ここすげぇ。

……気づいたと思うが、俺は『クスノキさん』と呼んでいる。

街の人々は『クスノキかんちょう』と呼んでいるが、それはもちろん博物館の館長であると同時に、潜水艇の艦長でもあるからだ。

だから『かんちょう』とひらがなにしているのは結構重要らしい。

『かんちょう』とひらがなで読むのは子供っぽいから、俺はさん付けしてるんだけどな。ちっさいプライドさ。

中に入ってみるが、青装束の姿は見えない。
どうやらアクア団はまだ中に入っていないようだ。時間無駄にしすぎだろ。

その後は展示ブースも周り終え、あっけなく外へと出てしまった。
ホントにあっけなく。時間にして2時間は経ってたけど。
ちなみに入館料は５０円。安っ。
展示してるのが自分で集めた資料が中心だから、あんまり手数料とかかかんないのかな……。

ちなみにソラは目をキラキラさせながら展示物を見ていた。

「何の実入りもなかったけど……楽しかったか？」
「はいっ！！」

……まぁこの笑顔が見られただけで良しと……しても良いよな？

「んじゃ、これで調査終了だ」
「そ、それじゃあ……」
「おう、約束だ」

やったー！　とソラが万歳をする。なんかその純粋さが眩しい……。
しかしなぁ……

「俺、水着持ってないぞ」
「だいじょうぶです！　いつも穿いてらっしゃる下着のサイズは知ってますから！」
「なんで知ってんだよ！？」
「えっ？　お母さまのお手伝いでたまに見る機会がありまして。お母様からも詳しく教えてもらいましたし」
「なんでそんな事ばっか吹き込むんだうちの家族はっ！　俺とソラをどうしようってんだよ！」
”そんなの決まってるじゃないか。鈍いから教えてやんないけど”
空耳が聞こえた……教えやがえよこんちくしょう……幻聴にさえすがりてぇよ……。
ガクリと崩れた俺に、ソラが声をかけた。
「か、カナタさんっ！　遊びましょうっ！　せっかくですからみんなでっ！！」
ソラが六つのボールを俺に見せてくる。
……どいつもこいつもニヤつきやがって……。
「ふ、フフフフ……どいつもこいつも……」
「ふぇっ！？」
すぅ……と息を吸う。
「本気で相手してやるぜぇ……」
「ヒッ！？」

俺、キレるとどうも静かになるらしい。あれだ、炎は熱くなるほどに無色に近づいていくのと同じ原理だろう（違
まぁ、この怒りを鎮める方法は一つぐらいしかないわけで。

「ソラ」
「は、はいぃぃ！」
「バトルだ」
「えええええ！！！」

そのニヤけた面、ぶっ飛ばす……。

そして冷静な頭の隅がこう言っていた。

『――――――――――――――――――これってやつあたりじゃん。かわいそうにごめんね。でも今体の制御聞かないから更にごめんね』
「そんなあんまりなっ！」
『……頭の中の声を読むなよ……』

「そんじゃ坊主、わしはこの近くでピーコちゃんと遊んでくるから、何かあったら呼んでくれぃ！」
「はい、ありがとうございました」

カイナシティ……ここに来るのは初めて、かな。
初めての船旅で船酔いしちゃって、起きた時にはトラックの中だったからね……それにしても、どうやってミシロまでトラックで荷物を届けたんだろう……港町二つからは陸路ではいけないし……

きっと裏道があったんだろうな、うん！！
これ以上考えたら駄目な気がした（汗

んーっ！！　と背伸びをしていざ用事を果たしに行こう、というときに。

「お、ユウキ君」

「こ……こんにちわ～……」

「……だいじょうぶですか？」

「おう」

「だ、大丈夫ですよ～」

片方ゼッタイ嘘だっ（汗

十二話　調査（後書き）

二ヶ月近く放置してすみませんでした……まったく筆が進まなかったので……
話は少し進んだかな……？
でも短いですごめんなさい……
ユウキ君再登場。これで話が進む……のか？

次回も一か月後になるかもしれませんが、今後ともよろしくお願い申し上げます。

それではっ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3371u/

よくある転生の話-携帯獣の話-

2012年1月15日02時45分発行